

5 . 掲載種の解説

(1) 哺乳類

レッドリストに掲載された各哺乳類について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種、地域個体群についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

なお、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の表記については、略称として「種の保存法」と表記することとした。

【 掲載種の解説（哺乳類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は“MAMMAL SPECIES OF THE WORLD, 3rd edition” (Wilson & Reeder, 2005) に準拠した。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「哺乳類レッドリスト」(環境省,2007)の全国での評価区分も各頁右上に記述した。なお、スナメリについては、「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック」(水産庁,2000)の全国での評価区分を頁右上に記述した。各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産哺乳類頭骨図説」(阿部,2000)に準拠した。なお、スナメリについては、「レッドデータ日本の哺乳類」(日本哺乳類学会,1997)に準拠した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。また、本調査及び平成9年度から平成13年度にかけての「レッドデータブックあいち2002動物編」作成時の調査において、対象種の生息が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ(標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ)を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を●印で表示した。また、絶滅種の過去の生息地は†印で表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる生息地が複数であっても1点として表示した。

【生息地の環境 / 生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 哺乳類 執筆者 】

子安和弘
織田銑一

【 哺乳類 調査協力者 】

次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

安藤 洋	植松 康	大池辰也	大畑孝二	岡田慶範	小鹿登美
加藤貞亨	川田 伸一郎	栗原 望	佐竹義雄	曾根啓子	高田靖司
築地原 延枝	寺西敏夫	中尾文香	夏目明香	夏目長城	名和 明
橋本 肇	長谷川 明子	長谷川 道明	萩原聖子	水野マリ子	安井謙介
吉鶴靖則	若林郁夫				

愛知学院大学歯学部解剖学講座 愛知学院大学歯学部歯科資料展示室 勇魚会
志摩半島野生動物研究会 豊田哺乳類研究会 豊田市自然観察の森
豊橋市立自然史博物館 名古屋大学大学院生命農学研究科附属フィールド教育研究
支援センター設楽フィールド 名古屋哺乳類研究会 鳳来寺山自然科学博物館
南知多ビーチランド

(敬称略)

情報の提供、データベース作成で御協力いただいた関係者で、上記の方々以外にも多数いらっしゃるが、関係者の皆様にここで深い感謝の念を表明しておきたい。特に県内で新規に発見された 3 種のコウモリ類は、いずれもコウモリの研究に携わる研究者の方々からの貢献によるものであり、それが「レッドデータブックあいち県民参加調査」や論文の形でこうしたリストに掲載されたこと、また 3 種すべてが絶滅のおそれのある愛知県産野生動物種として愛知県哺乳類レッドリストに掲載される契機となったことに改めて関係者の方々に感謝の意を表したい。

オオカミ *Canis lupus* Linnaeus

【選定理由】

かつて北海道・本州・四国・九州に生息していたが、北海道では1800年代末に、本州では1905年奈良県での捕獲記録を最後に絶滅した(阿部,2000)。県内では1600年代末から1700年代中期に名古屋市内外に出没したことが『鸚鵡籠中記』に述べられており(宮尾ほか,1984a; 千葉,1995; 朝日,1995)、比較的最近まで生息していたことは確かであるが1900年代以降はまったく記録がない。

【形態】

頭胴長 950~1290mm、尾長 270~400mm、後足長 245~250mm、耳介長 80~115mm、頭骨最大長 186.0~269.5mm (阿部,2000)。イヌに似ているが体が細く、体毛が長い。四肢が長く、趾行性。前足に5指、後足に4指をもつが前足の第1指(母指)は接地しない。陰茎骨をもつ。頭骨形態では吻が非常に細長く、前頭部が相対的に低くなっているために横から見ると鼻骨前端から前頭部にかけての凹みが浅い(阿部,2000)。乳頭式は1+2+1=8。歯式はI3/3,C1/1,P4/4,M2/3=42。

【分布の概要】

【県内の分布】

現在日本国内で絶滅しており、県内にも分布しない。オオカミの出土した遺跡は縄文時代の伊川津貝塚(田原市渥美地域：渥美町教育委員会,1988)と平井遺跡(宝飯郡小坂井町：酒詰,1961)、弥生時代の朝日西遺跡(清洲市：愛知県埋蔵文化財センター,1992)。歴史時代になってからは、1600年代末から1700年代(名古屋市北区、春日井市、小牧市、犬山市、丹羽郡大口町、扶桑町など：新家,2005)、明治の中頃まで(北設楽郡設楽町：伊藤,1956)、といった記録がある。

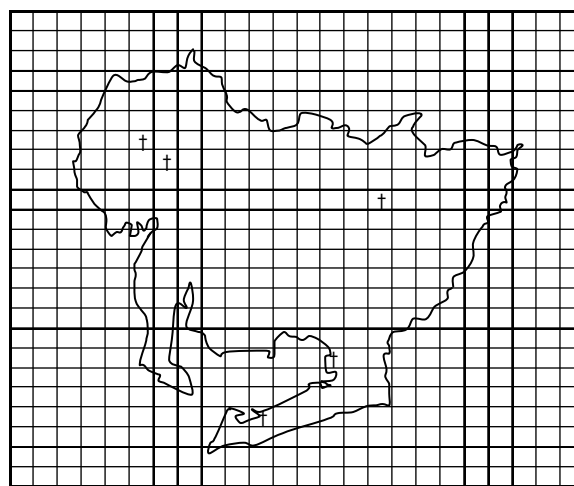
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布していたが、北海道では1800年代末に、本州では1905年の記録(奈良県)を最後に絶滅した。

【世界の分布】

ユーラシア大陸と北米大陸に分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

かつての国内の生息地であった、北海道、本州、四国、九州のすべての地域で絶滅している。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

国内・県内で絶滅している。北海道ではニホンジカを主食にしていたため、乱獲によるシカの激減にともなって家畜を襲うようになり、積極的な駆除活動のおこなわれたことが絶滅の重要な一因であると考えられている(阿部,2000)。本州では農耕地の拡大にともなう大型草食獣の減少のほか、疾病の流行もオオカミの減少の要因と考えられる。絶滅の背景として、後期更新世以降の温暖化、島嶼化と開発の進行があり、体の小型化と絶滅に関係があるといわれている(宮尾ほか,1984b)。

【保全上の留意点】

国内・県内での絶滅は確実であり、オオカミの生存を可能にする広大な森林などの環境も残されていない。

【特記事項】

種の保存法による国際希少野生動植物種。下顎第一大臼歯の長さ(歯冠近遠心径)は先史時代までは明らかに大型のイヌよりも大きい、歴史時代になると重なりがみられる(宮尾ほか,1984b)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
朝日重章, 1995. 摘録鸚鵡籠中記(下)元禄武士の日記, 374pp. 岩波書店, 東京.
愛知県埋蔵文化財センター, 1992. 朝日西遺跡, 318pp. 愛知県埋蔵文化財センター, 愛知県海部郡弥富町.
伊川津遺跡発掘調査団(編), 1988. 伊川津遺跡. 渥美町埋蔵文化財調査報告書4. 渥美町教育委員会, 愛知県渥美町.
伊藤正松, 1956. 山犬・カシヤ・河童・洲の主. 野帳(豊橋市公民館三階瓜郷遺跡調査会), 1: 9-11.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984a. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
宮尾嶽雄・西沢寿晃・花村 肇・子安和弘, 1984b. 早期縄文時代長野県栃原岩蔭遺跡出土の哺乳動物, 第7報オオカミの骨と歯, 成長, 23 (2): 40-55.
新家献佑, 2005. 狼、暴れ候：日記にみる尾張藩事件簿, 127pp. 新風社, 東京.
酒詰仲男, 1984. 日本縄文石器時代食料総説, 338pp. 土曜会, 京都. 再版.

アシカ *Zalophus japonicus* (Peters)

【選定理由】

かつて日本近海に広く分布し、国内での繁殖も確認されている (伊藤・中村,1994)。1949～1975年の間に 8 地点 13 例以上の生息確認と 2 地点での繁殖が確認されているので絶滅と断定できない (伊藤,1997)。先史時代には三河湾内の複数の地点で生息していたことが確認されているが、南知多町篠島では 1887 年頃、田原市伊良湖岬では 1906 年頃絶滅したと考えられる (分布の項参照)。

【形態】

体重 445.3～563.0kg(雄)、体長 2317～2484mm(雄)、1640mm(雌)、尾長 390～489mm、頭骨基底長平均(雄)313.8mm (伊藤・井上,1993)。体毛は雄で暗褐色、雌では灰褐色をしている。吻が長く、小さな耳介をもつ。性的二型があり、雄は雌より顕著に大きい。後肢は体の下に曲げることができる。尾は明瞭で陰茎骨をもつ。頭蓋では眼窩間幅が比較的広く、後眼窩突起と翼蝶形骨孔がある (阿部,2000)。歯式は I3/2,C1/1,P4/4,M2/1=36。上顎第二大臼歯はしばしば欠如する。

【分布の概要】

【県内の分布】

国内では絶滅した可能性が高く、現在は県内に分布していない。伊川津遺跡 (田原市渥美地域)、枯木宮貝塚 (西尾市)、神明社貝塚 (南知多町篠島) では遺存骨が出土している。篠島では 1887 年頃まで生息しており (出村,1921)、伊良湖岬 (田原市渥美地域) では 1859 年から 1906 年頃まで生息していたことが確認されている (伊藤・中村,1994)。

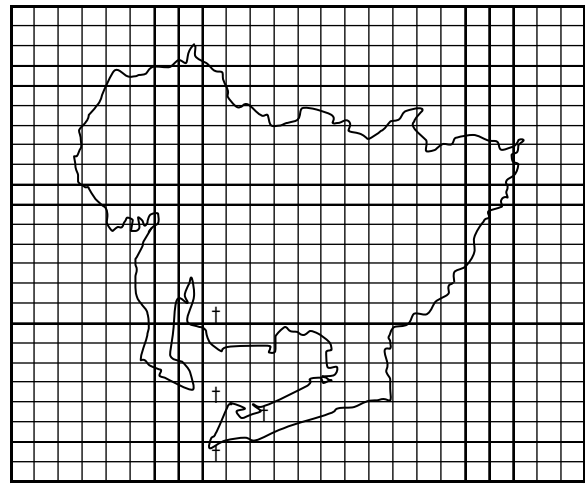
【国内の分布】

日本海側ではサハリン南部から長崎県まで、太平洋側では千島諸島、北海道から宮崎県まで分布していたが、1974 年に礼文島で捕獲されたのを最後に生息情報がない (伊藤・中村,1994)。

【世界の分布】

日本近海、ロシア (カムチャッカ、サハリン)、韓国東部沿岸に生息していたと考えられる (Christopher Wozencraft, 2005)。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

繁殖地の竹島や伊豆諸島では 5～6 月に雄は十数頭の雌を率いたハレムを形成し、交尾を行っていた (伊藤・中村,1994)。県沿岸域に継続して生息できる環境は残されていないと考えられる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では現在絶滅しており、生息していない。アシカは繁殖期に限られた繁殖場でのみ繁殖活動を行う生態的特性をもつことから、こうした場所における狩猟活動が減少の要因としてインパクトが強かったと考えられている (伊藤,1997)。

【保全上の留意点】

1990 年代、国内での絶滅は確定しておらず、保全対策として生存個体または個体群の発見と生息調査が提言されていた (伊藤,1997)。現在 IUCN のレッドリストでは絶滅とされ、国際的にも絶滅した可能性が高い (Christopher Wozencraft, 2005)。国内または周辺での生息が続いている場合、愛知県沿岸に漂着する可能性もあり、その場合は厳重な個体保護が必要とされる。また、別種とされるカルフォルニアアシカ (*Zalophus californianus*) の漂着にも注意が必要である。

【特記事項】

県内におけるアシカの分布は伊良湖岬のみが知られていたが、明治年代まで篠島にも生息していたことや県内遺跡からの記録はアシカの生息地として三河湾が重要であったことを示している。

【引用文献】

阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.

Christopher Wozencraft, W., 2005. Order Carnivora. Wilson, D.E. & Reeder, D.M. eds., Mammal species of the world: A taxonomic and geographic reference, pp.532-628. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

出村 銀, 1921. 篠島史蹟, 170pp. 博信社, 名古屋市. (篠島史蹟復刻実行委員会による復刻版, 1979 による)

伊藤徹魯, 1997. クロアシカ. レッドデータ日本の哺乳類, pp.118-119. 文一総合出版, 東京.

伊藤徹魯・井上貴央, 1993. ニホンアシカ成獣の体長・体重の復元. 成長, 32 (2): 89-97.

伊藤徹魯・中村一恵, 1994. ニホンアシカの復元にむけて(9) ニホンアシカの分布の復元. 海洋と生物, 16 (5): 373-393.

カワウソ *Lutra nippon* Imaizumi et Yoshiyuki

【選定理由】

国内では 1923～1927 年頃までは全国各地で毎年 35～120 頭が捕獲されていた(御厨,1976)。1928 年に捕獲が禁止された後も減少をつづけ、1979 年の高知県での記録以降は生息が確認されていない。県内では 1923 年までに絶滅状態になっていたと考えられる。

【形態】

頭胴長 645～820mm、尾長 390～489mm、後足長 117.5～134.0mm、耳介長 21～27mm、頭骨基底全長 105.8～119.2mm。水生に適応しており、頑丈で細長く円筒状の体をしている。短い前肢と後肢の指趾には水かきがある。背面の毛色は黄褐色で、腹面は淡灰褐色をしている。尾は基部が太く、胴からなめらかに移行しているのでその境界部は不明瞭である。頭蓋は扁平で吻が短い。鼓室胞は低くて三角形をしている。歯式は I3/3,C1/1,P4/3,M1/2=36。

【分布の概要】

【県内の分布】

日本国内では絶滅した可能性が高く、現在は県内に分布しない。八王子貝塚(西尾市)と伊川津貝塚(田原市)(ともに縄文時代：宮尾ほか,1990；伊川津遺跡発掘調査団,1988)、朝日西遺跡(清洲市)(弥生時代：愛知県埋蔵文化財センター,1992)で遺存骨が出土している。1737 年頃には丹羽郡と海西郡(現海部郡の一部)に(宮尾,1985)、1887 年頃には篠島(南知多町)に(出村,1921)、1913 年前後には新城市長篠に(長篠郷土研究会,1958)生息していたという。豊川市でも 1945 年以前の文献には生息していた記述がある(豊川市役所,1973)。

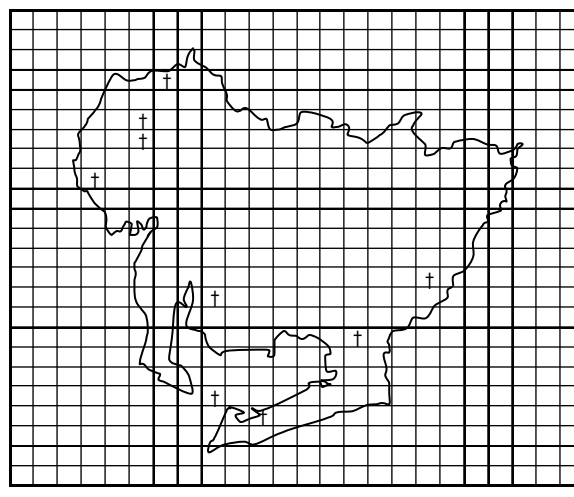
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に生息していたが、北海道では 1955 年の捕獲を最後に、四国では 1979 年に高知県須崎市の新荘川で撮影されたのを最後に絶滅した可能性が高い。

【世界の分布】

日本固有種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

高知県南西部に生存する可能性も完全には否定できないが、国内ですでに絶滅状態と考えられる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

禁猟になる 1928 年までの乱獲と河川環境の悪化により絶滅したと考えられる。

【保全上の留意点】

乱獲の原因はカワウソの良質な毛皮が高値で取引されたことであるが、さらに水系の汚染や護岸工事といった生息環境の破壊がカワウソを絶滅させたという(宮尾,1985)。現在、県内にカワウソの生息が可能な環境は残されておらず、分布を回復させる余地は残されていない。

【特記事項】

愛知県では奥三河山間部を除く県内全域にヌートリアが生息しており、カワウソの最近の記録の中にはヌートリアを誤認したのがあると考えられる。日本哺乳類学会では絶滅危惧種とされる(佐々木,1997)。種の保存法での国際希少野生動物種。文化財保護法による特別天然記念物。

【引用文献】

- 愛知県埋蔵文化財センター, 1992. 朝日西遺跡, 318pp. 愛知県埋蔵文化財センター, 愛知県海部郡弥富町.
伊川津遺跡発掘調査団(編), 1988. 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4. 渥美町教育委員会, 愛知県渥美町.
出村 銀, 1921. 篠島史蹟, 151pp. 博信社, 名古屋市.
御厨正治, 1976. ニホンカワウソ雑記. 哺乳動物学雑誌, 6:214-217.
宮尾嶽雄, 1985. 哺乳類. 西春町史資料編 2, pp.221-259. 西春町史編集委員会, 西春町役場.
宮尾嶽雄・酒井英一・子安和弘・蜂矢喜一郎, 1990. 愛知県西尾市八王子貝塚出土の陸上哺乳類遺存体, pp.32. 西尾市教育委員会, 愛知県西尾市.
長篠郷土研究会, 1958. 特殊な動物. 長篠村史, pp.68-70. 長篠郷土研究会, 愛知県鳳来町.
佐々木 浩, 1997. イタチ科 Mustelidae. レッドデータ日本の哺乳類, pp.100-107. 文一総合出版, 東京.
豊川市役所, 1973. 豊川市史, 852pp. 愛知県豊川市, 豊川市.

ミズラモグラ *Eurosaptor mizura* (Günther)

【選定理由】

日本固有種で、本州のみに生息しており、その分布域は青森県から広島県にまでおよんでいる(阿部,2000)。しかし、各個体群の生息地は分断されており、連続した分布域はほとんどない。愛知県では5市町の6ヶ所の分布記録があるにすぎず、分布域、生息個体数ともに限られていると考えられる。県内の個体群は孤立しており、生息環境の悪化により絶滅の可能性があると考えられる。

【形態】

体重 26.0~35.5g、頭胴長 77.0~107.0mm、尾長 20.0~26.0mm、後足長 11.0~16.0mm、頭骨最大長 25.5~28.0mm (阿部,2000)。アズマモグラに似たモグラであるが、体の大きさははるかに小さい。短く太い物の上面前端には前後に長い三角形の裸出部がある。円盤状の鼻鏡の前方に鼻孔が開く。耳介はなく眼は皮下に埋まっている。手掌の長さとはほぼ等しく、長い平爪状の爪を持つ。歯式は I3/3, C1/1, P4/4, M3/3=44、脊柱式は C7+T13+L6+S5+Cd13=44。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市の寧比曾岳(旧足助町)(子安ほか,2001)と御所貝津町(旧稲武町)(原田,1996a)、北設楽郡設楽町の田口と田峯(原田,1996b)、新城市(鳳来地域)(原田,1996a ; b)、犬山市栗栖(木村・広瀬,1982)。

【国内の分布】

本州の山地(青森、秋田、岩手、宮城、栃木、群馬、埼玉、新潟、富山、石川、長野、山梨、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、奈良、和歌山、鳥取、島根、広島)の23府県に生息する。

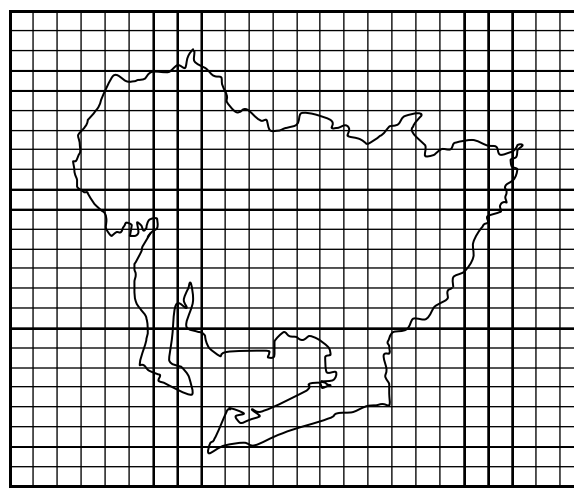
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

低山から亜高山の針葉樹林にまで生息するとされるが(例えば阿部,2000)、石川県の白山域では高山帯のハイマツ林縁部や岩場にも生息する。愛知県内には高山帯域と亜高山帯域は存在しないので、生息地はすべて山地帯である。県内のミズラモグラは土壌の発達の悪い場所やその周辺に生息すると考えられている(子安ほか,2001)。生息数が少ないため、生態についてはほとんど情報がない(阿部,2000)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では6ヶ所で生息が確認されているにすぎない。もともと生息密度が低い上に、生息域が重複するアズマモグラやコウベモグラという対抗種によって生態的に閉じこめられ、個体群が分断されていると考えられる。こうした小個体群は構成個体数も少なく分布域も狭いため、森林の伐採、単一植生の植林、林道建設やダム工事などによる環境悪化により小個体群が絶滅したと考えられる。

【保全上の留意点】

本種の発見記録のある地点とその周辺では常に本種の小個体群が絶滅する可能性があることを前提とする必要がある。ダム湖や道路整備によって個体群が分断されない対策が必要であるが、生息地の破壊・分断が予測される場合には、回避、低減、代償等のミティゲーションが必要である。

【特記事項】

原田(1998)によると、ミズラモグラは北設楽郡の設楽町(旧設楽区域)と豊根村(旧豊根村区域)で観察されているというが、標本の所在などの詳細も知ることができなかったため、分布域に豊根村を含めることを留保した。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 本文編, pp.508-513. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.
原田猪津男, 1998. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-資料-, pp.186-190. 豊川市, 豊川.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.
木村光伸・広瀬 鎮, 1982. 哺乳類. 犬山市史資料編二自然, pp.235-268. 犬山市, 愛知県犬山市.

【関連文献】

- 林 哲・子安和弘, 1998. 白山地域のミズラモグラの分布. 石川県白山自然保護センター研究報告, (25): 25-28.

ヤマコウモリ *Nyctalus aviator* (Thomas)

【選定理由】

本種はアジア東部に生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いものの生息地域における密度は低く個体数も多くない上に 1970 年以降生息数が激減していると考えられている (前田,1994)。県内では東三河と西三河の平野部に位置する 2 市で記録されているにすぎない。本種は県内の翼手類では唯一の純粋な森林性コウモリで、良好な環境を保った森林に高度に依存している。県内では生物多様性の高い森林が消滅や減少によって局地的に存在するにすぎず、本種の生息を保障する良好な環境の不足が本種の個体群に絶滅の危惧をもたらしていると考えられる。

【形態】

体重 35~60g、頭胴長 89~113mm、前腕長 57~66mm、尾長 51~67mm、脛骨長 21.5~27.0mm、後足長 (爪を含む) 13.0~15.5mm、耳介長 17.0~20.5mm、耳珠長 8~10mm、頭骨最大長 19.7~21.9mm (阿部,2000)。大型で毛色は体が赤褐色で皮膜は黒褐色。扁平で幅の広い脳頭蓋をもち、項稜が発達している。左右の項稜が会合う外後頭隆起の部分は上方に盛り上がっている。歯式は I2/3, C1/1, P2/2, M3/3=34、脊柱式は C7+T10+L5+S5+Cd9~10=36~37 (宮尾,1974)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊川市大崎 (原田,1998a,b) と豊田市京ヶ峰 (子安ほか,2001 ; 2008) で記録されているのみである。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬、壱岐島、福江島、沖縄島での記録がある。

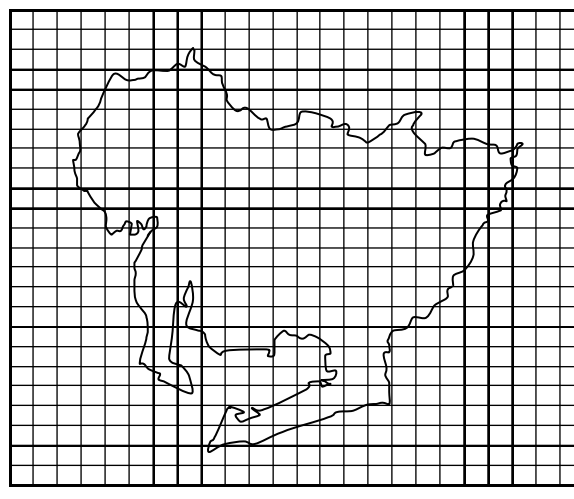
【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国東部に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

昼間は樹洞をねぐらにして休息しており、日没後に出洞して採餌し、夜明け前に戻る。飛翔性昆虫を求めて夜中も飛翔し、森林の樹冠上や開けた場所で採餌している。1 頭が 1 晩に捕食する昆虫の量は 20g にも達する (前田,1994)。餌を求めて長距離を高速で飛翔する。仔は生後 40~45 日で親と同じ大きさになって飛翔を開始する。雌は生後数ヶ月で性成熟して秋に交尾をおこない翌年の初夏に通常 2 仔、まれに 1 仔を産む。出産・育児をおこなう雌は大きな樹洞で 20~50 頭ほどの繁殖コロニーをつくる。雄はこの時期に 1 頭から十数頭の群をつくって樹洞や鳥の巣箱にすんでいる。寿命は 6 年以上 (阿部,2000)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、しかも繁殖コロニーの形成を可能にする巨木の樹洞もきわめて稀である。したがって、現時点では県内に本種の繁殖コロニーが存在する可能性はきわめて低い。本種の減少の要因は伐採による原生林の縮小によって個体群の維持が困難になったことと繁殖コロニーを確立できる樹洞がほとんど失われていることである。

【保全上の留意点】

本種が県内で繁殖しているかについては不明であるが、その飛翔能力の大きさから採餌圏として県内が分布範囲に含まれていると考えられる。当面は原生林とその周辺の広葉樹林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林や人工樹洞の設置などを推進する必要がある。

【特記事項】

豊川市の記録は 1996 年 3 月 9 日に大崎の家屋内で死亡していたものであり (原田,1998b)、豊川市の記録は 1993 年 10 月 9 日に京ヶ峰の豊田市自然観察の森・ネイチャーセンターの軒下に昼間懸垂している個体が観察されたものである (子安ほか,2001)。2003 年 4 月 3 日昼過ぎ、上記豊田市自然観察の森で、愛知県下で 3 例目の個体の飛翔写真が水野マリ子氏によって撮影されている (子安ほか,2008)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1998a,b. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-本文-, pp.365-370(a). -資料-, pp.186-190(b). 豊川市, 豊川.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.
子安和弘・水野マリ子・佐竹義雄, 2008. 愛知県で生息が確認された 3 例目のヤマコウモリ. マンモス特別号, (10): 19-24.
前田喜四雄, 1994. コウモリ目 CHIROPTERA. 日本の哺乳類, pp.37-70. 東海大学出版会, 東京.
宮尾嶽雄, 1974. 小翼手類の脊椎骨数. 日本哺乳類雑記, 3: 30-31. 信州哺乳類研究会, 松本.

チチブコウモリ *Barbastella leucomelas* (Cretzschmar)

【選定理由】

ヒナコウモリ科に属するチチブコウモリは国内では北海道と本州に分布することが知られている。北海道では多数の個体が捕獲されているが、本州ではごく少数の捕獲例しか知られていない(コウモリの会,2005;前田,2005;佐藤ほか,2008)。愛知県では新城市玖老勢の1個体(2006年12月10日:橋本 肇氏)と北設楽郡豊根村の2個体(2007年2月:佐藤ほか,2008)が確認されているにすぎない。

【形態】

左右の耳介の根元が頭頂部で接触するのが特徴で、前腕長 39~44mm、頭胴長 50~63mm、尾長 43~54mm、褐色系の体毛を持つ(コウモリの会,2005;前田,2005;佐藤ほか,2008)。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市玖老勢と北設楽郡豊根村富山の2地点で計3個体が記録されている(橋本 肇氏;佐藤ほか,2008)。

【国内の分布】

北海道、岩手、福島、埼玉、神奈川、静岡、長野、愛知、岐阜、愛媛、高知の11道県から知られている。

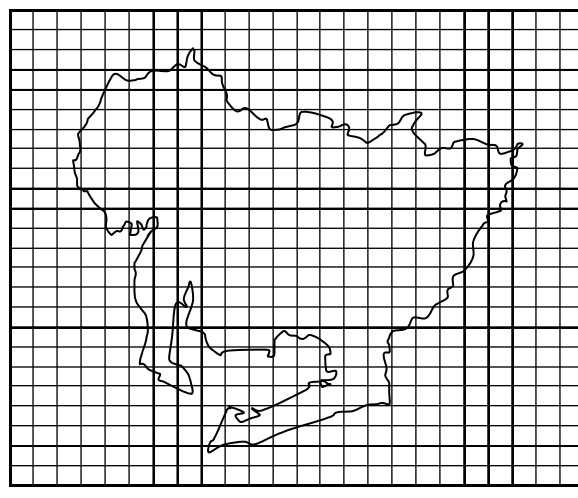
【世界の分布】

日本(北海道、本州、四国)、中国西部、ネパール、インド、アフガニスタン、イラン北部、パミールからコーカサス、シナイ半島、エリトリアに分布(Simmons,2005)。

【生息地の環境/生態的特性】

岐阜県では、高山市高根町の野麦峠周辺の原生林と人工林が混在している場所の樹洞での出産が2007年の7~9月に山本輝正氏らによって確認されている(朝日新聞 2008年5月11日付岐阜全県版朝刊)。愛知県で生息が確認された豊根村では、2007年2月17日に富山のトンネル(周囲の植生は低木層に多様な広葉樹が見られるスギ人工林)内で冬眠中の雌雄不明2個体を確認したものである(佐藤ほか,2008)。

県内分布図



【現在の生息状況/減少の要因】

豊根村富山地域での冬眠個体の発見は、愛知県内における本種の生息と越冬洞の存在をあきらかにしたものとえよう。しかしながら、県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、しかも繁殖コロニーの形成を可能にする巨木の樹洞もきわめて稀である。したがって、現時点では県内において本種の繁殖コロニーが発見される可能性は低いといわざるをえない。本種の減少の要因は伐採による原生林の縮小によって採餌場所が喪失されて個体群の維持が困難になったこと、繁殖コロニーを確立できる樹洞がほとんど失われたことである。

【保全上の留意点】

本種が県内で繁殖しているかについては不明であるが、その飛行能力の大きさから採餌圏として県内が本種の分布範囲に含まれているのは確実である。当面は原生林とその周辺の広葉樹林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林や人工樹洞の設置などを推進する必要がある。

【特記事項】

2007年2月17日に富山のトンネル(隧道)で発見された冬眠中の2頭のうち、1頭は隧道の壁面に直接しがみついていたが、1頭は壁面の裂隙内に潜んで冬眠していたという(佐藤ほか,2008)。このように隧道の裂隙内にコウモリが潜むことがよくあるので、調査時には注意が必要である。

【引用文献】

- コウモリの会(編), 2005. コウモリ識別ハンドブック, 69pp. 文一総合出版, 東京.
前田喜四雄, 2005. 翼手目(コウモリ目). 阿部 永, 監修, 日本の哺乳類, 第2版, pp.25-64. 東海大学出版会, 東京.
NPO 静岡県自然史博物館ネットワーク, 2007. 表紙の写真. 自然史しずおか, (20): 1.
佐藤顕義・勝田節子・山本輝正, 2008. 愛知県におけるチチブコウモリとヒナコウモリの記録. マンモ・ス特別号, (10): 25-28.
Simmons, N. B., 2005. Order Chiroptera. Wilson, D.E. & Reeder, D.M. eds., Mammal species of the world: A taxonomic and geographic reference, pp.312-529. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

【関連文献】

- 子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモ・ス特別号, (3):19-34.
寺西敏夫, 2002. 愛知県のコウモリ:アブラコウモリを除く(1998~2002,1). マンモ・ス特別号, (4): 3-13.

ノレンコウモリ *Myotis bombinus* Thomas

【選定理由】

ノレンコウモリはヒナコウモリ科に属する翼手類で、環境省のレッドリストでは絶滅危惧 II 類に指定されている。国内では北海道、本州、四国、九州、口永良部島に分布する洞穴性のコウモリである。中部圏で生息することが発見されたのも近年のことであり、愛知県でも 2006 年 11 月に最初の 3 個体が発見された (佐藤ほか,2008)。県内を含む中部圏での発見個体数も少なく、県外で少数の繁殖個体群が発見されているのみであり (佐藤ほか,2008)、県内での繁殖も確認されていない。

【形態】

体重 5~8g、頭胴長 43.1~55.0mm、前腕長 38~42mm、尾長 39~48mm、脛骨長 15.7~17.0mm、後足長 (爪を含む) 10.2~11.5mm、耳介長 15.1~18.1mm、頭骨最大長 14.4~15.3mm。中型種。飛膜は外側趾の基部につき、腿間膜の後縁に細毛が列生する。耳珠は耳介の 1/2 以上の長さになる (阿部,2000)。歯式は I2/3, C1/1, P3/3, M3/3=38、脊柱式は C7+T10+L5+S5+Cd9=36 (宮尾,1974)。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡の天竜川水系 (豊根村と東栄町) の車両用トンネル (隊道) 3 地点 (2006 年 11 月以降、標高 550m の 1 地点; 200m の 2 地点: 佐藤ほか,2008) で 7 個体、および北設楽郡設楽町清崎の隊道で 1 個体 (2006 年 12 月 10 日: 橋本肇氏) 計 8 個体が発見されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、口永良部島。

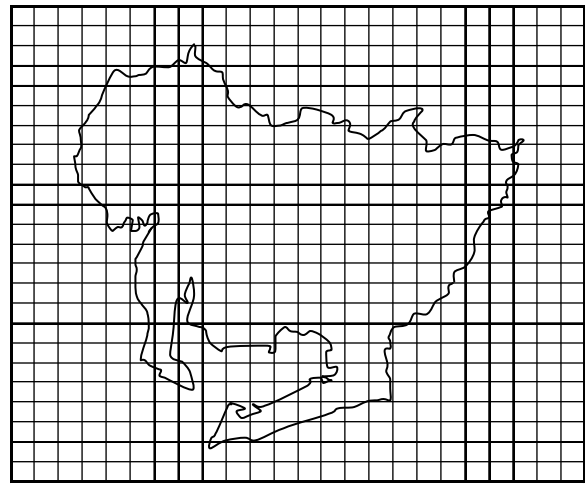
【世界の分布】

日本から朝鮮半島、シベリア南東部、中国東北部。

【生息地の環境 / 生態的特性】

洞穴 (人工洞・隊道を含む) をねぐらとし、時に家屋を利用する (佐藤ほか,2008)。少数個体で見られることが多いが、50~100 個体の哺育集団をつくることもある。小型の蝶、甲虫、ハエなどの昆虫やクモなどを捕食する。初夏に 1 仔を産む (阿部,2000)。雌の多くは生後満 1 年で出産を始め、7 歳まで毎年出産し、一部は 10 年以上生きる (Funakoshi, 1991)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

愛知県で知られている 8 個体はすべて隊道で発見されており、4 月に 2 個体、7 月に 2 個体、11 月に 3 個体 (以上、佐藤ほか,2008)、12 月に 1 個体 (橋本 肇氏による) 観察されたのみで、繁殖コロニーは発見されていない。静岡県为天竜川水系で確認された出産哺育のねぐら (標高 500m の車両用トンネル) 2007 年 7 月 8 日~22 日の間に幼体 3 個体とそれを哺育する成体 3 個体が観察されている。減少の要因は、餌となる昆虫を含む森林環境の破壊、ねぐらとなる洞穴・隊道の破壊などがあげられる。

【保全上の留意点】

2006 年 3 月から 2008 年 2 月まで、愛知県、静岡県、長野県の 3 県が隣接する地域でノレンコウモリの周年動態を調査した結果によると、天竜川水系の 8 地点 (標高 200~650m) と大井川水系の 7 地点 (標高 500~700m)、計 15 地点の車両用隊道で延べ 124 個体を観察し、そのうちの 8 個体が保育中の幼体であったという (佐藤ほか,2008)。このように、本種の生息と繁殖にかかわる隊道の役割が大きいので、その周囲を含む環境の保全とモニタリングに留意する必要がある。

【特記事項】

三重県では 2003 年に (佐野,2003)、石川県では 2002 年に (山本・野崎,2002) 発見された。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
Funakoshi, 1991. Reproductive ecology and social dynamics in nursery colonies of the Natterer's bat *Myotis nattereri bombinus*. J. Mammal. Soc. Japan, 15: 61-71.
佐野 明, 2003. 三重県におけるノレンコウモリの初記録. 紀伊半島の野生動物(7): 20.
佐藤顕義・勝田節子・山本輝正, 2008. 大井川水系および天竜川水系で確認したノレンコウモリ *Myotis nattereri* の出産哺育と周年動態. コウモリ通信, 16 (1): 2-9.
宮尾嶽雄, 1974. 小翼手類の脊椎骨数. 日本哺乳類雑誌, 3: 30-31. 信州哺乳類研究会, 松本.
山本輝政・野崎英吉, 2002. 白山地域のコウモリ目録. 石川県白山自然保護センター研究報告, 29: 74-76.

コテングコウモリ *Murina silvatica* Yoshiyuki

【選定理由】

本種はアジア東部に生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いが、愛知県では設楽町と豊根村における 3 地点での 4 個体が確実な生息記録である。森林性コウモリで、木の茂みで休息しているのが観察されている。県内では生物多様性の高い森林が局地的にしか存在していないので、本種の生息を保証する良好な環境の不足が本種の個体群に絶滅の危惧をもたらしていると考えられる。

【形態】

体重 3.5~6.5g、頭胴長 38~54mm、前腕長 28.4~33.0mm、尾長 26~33mm、脛骨長 12~16mm、後足長(爪を含む)7.0~10.5mm、耳介長 12~17mm、耳珠長 7.2~9.0mm、頭骨最大長 14.6~16.0mm。小型で、背面の毛色は黄土色から淡赤褐色。耳介は卵形で耳珠は細長い。腿間膜は上面の全面が毛で被われており(前田,1994)、尾端が 1mm ほど腿間膜の外に突出する(阿部,2000)。歯式は I2/3, C1/1, P2/2, M3/3=34。脊柱式は調べられていない。

【分布の概要】

【県内の分布】

公表されている県内の産地は北設楽郡設楽町のみであったが(原田, 1998)、2007年に実施された「レッドデータブックあいち県民参加調査」によって、北設楽郡豊根村(1個体)、設楽町清崎(人工洞と隧道の2地点)の2地点3個体が加わり(橋本 肇氏)、現在では3地点4個体の確実な記録が知られるようになった。

【国内の分布】

国後島(Tiunov,1997)、北海道、本州、四国、九州、壱岐、対馬で記録されている。

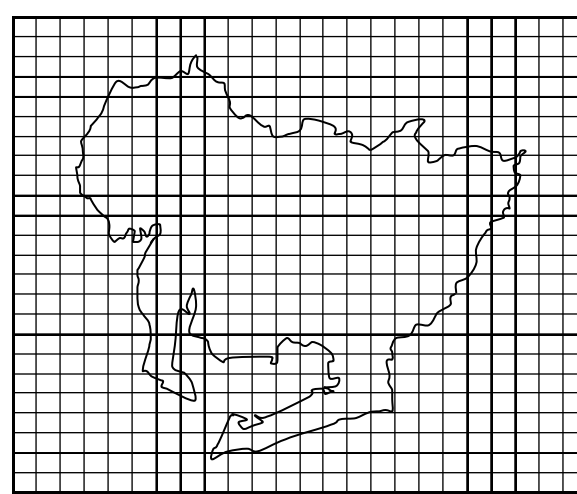
【世界の分布】

日本、サハリン、シベリア沿海地方、朝鮮半島に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

昼間は木の茂みの間や樹洞の中で休息しているが、たいていは単独でみつがっている。日没後ねぐらから出て採餌し、夜明け前に戻る。夜間に飛翔性昆虫を捕食するが、葉上に静止している昆虫も食べているらしい(前田,1994)。初夏に1~2頭の仔を出産するという。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、森林性コウモリがねぐらとして利用できる樹洞のある巨木も少ない。森林の伐採や単一樹種の植林が本種の採餌場所の環境悪化をもたらし、個体群の維持を困難にさせている。

【保全上の留意点】

生物多様性の高い森林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林やバットハウス(コウモリ用巣箱)・人工樹洞の設置などを推進する必要がある。また、生物相調査の際には森林性コウモリの生息可能性を常に考慮し、コウモリ類の生息状況を正確に把握するようにつとめなければならない。本種は人工建造物に住みつくことがあるので、より有効なコウモリ用巣箱を取り付けるなど保護施設の開発を進めることによって保護の成果が期待できるとされている(向山,2000)。

【特記事項】

Yoshiyuki は 1983 年に日本産のコテングコウモリが固有種であると考えて *Murina silvatica* という学名を与え、和名をニホンコテングコウモリとしている(Yoshiyuki, 1989)。*Murina silvatica* は IUCN2003 のレッドリストでは LR/nt (準絶滅危惧) のランクが与えられている。日本哺乳類学会では希少種とされている(前田・村松, 1997)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1998. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-資料-, pp.186-190. 豊川市, 豊川.
前田喜四雄, 1994. コウモリ目(翼手類). 日本の哺乳類, pp.37-70. 東海大学出版会, 東京.
前田喜四雄・松村澄子, 1997. 翼手目 CHIROPTERA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.31-55. 文一総合出版, 東京.
向山 満, 2000. ニホンコテングコウモリ. 青森県の希少な野生生物, p.111. 青森県環境生活部自然保護課, 青森.
Tiunov, M.P., 1997. [Chiroptera of the Far East], 134pp. Dalbnauka, Vladivostok.
Yoshiyuki, M., 1989. A systematic Study of the Japanese Chiroptera, 242pp. National Science Museum, Tokyo.

ツキノワグマ *Ursus thibetanus* G.[Baron] Cuvier

【選定理由】

かつては本州、四国、九州に広く分布していたが、九州では絶滅した可能性が高く、四国でも絶滅寸前の状態である(阿部,2000)。本州でも、下北半島、紀伊半島、東中国地域、西中国地域の各地域で絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている。県内では1932年以降3頭の狩猟統計記録と死体発見を含む数件の目撃記録があるのみで定住個体はないと考えられる(宮尾ほか,1984)。

【形態】

体重55.0~187.5kg、頭胴長1200~1630mm、尾長80mm前後、後足長(爪を含む)210mm前後、耳介長90mm前後、頭骨最大長189.0~265.2mm(阿部,2000)。ヒグマより小型で、全身黒色の毛で被われているが、前胸部に白色の月の輪の模様がある。頭蓋では脳頭蓋部が比較的大きく、吻は短い。眼窩前下端から頬歯列に垂線をおろした場合、この線は第1大臼歯の後部を通る(阿部,2000)。乳頭式は2+0+1=6。歯式はI3/3,C1/1,P4/4,M2/3=42。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村下黒川(1944年)、東栄町足込(1963年)、豊田市足助地域(1945年頃)、豊田市川面町(旧足助町)(1977年)で、捕獲記録ないし死体の発見例がある(宮尾ほか,1984)。2001年には豊田市足助地域と旭地域で別個体の目撃例(2件3個体)があった。2002年5月7日豊田市稲橋(旧稲武町)で再発見・射殺されて以来、県内各地から生息情報が寄せられている。

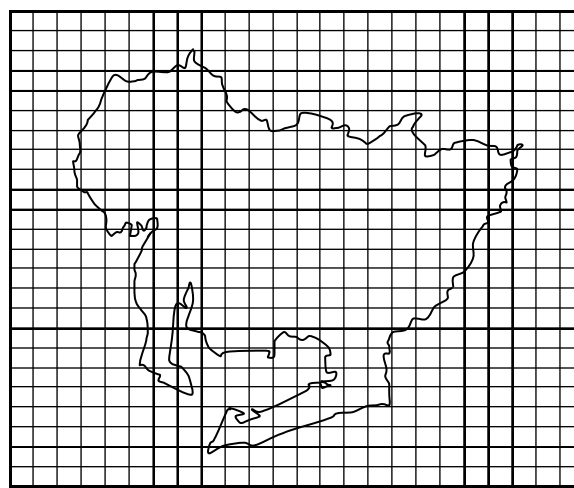
【国内の分布】

本州、四国、九州に生息していたが、九州では絶滅した可能性が高く、四国でも絶滅寸前の状態である(阿部,2000)。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、ロシア沿海地方、中国、台湾、海南島、インドシナ北部、チベット、ネパール。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本州中部地方ではブナ林に代表される冷温帯落葉広葉樹林が主要な生息地環境であるが、県内では面ノ木(豊田市稲武地域)、段戸裏谷(設楽町)などごく限られた面積しか残されていない。越冬場所としてブナなど大木の樹洞や岩穴などを利用する。冬眠中に1~2頭の仔を出産。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1963~1977年の間に4件5頭の捕獲記録・死体発見記録があったが(宮尾ほか,1984)、1970年代に報告された冬眠例や目撃談や目撃情報(愛知県自然保護課,1979)以降、2001年まで生息記録が絶えていた。2001年の目撃例後、2002年5月7日豊田市稲橋(旧稲武町)で再発見・射殺されて以来、2008年まで毎年相当数の目撃例がある(愛知県ホームページ「愛知県ツキノワグマ出没情報」)。減少の要因は森林の伐採・単一種の植林ならびに狩猟圧が考えられる。近年の目撃例の中には子グマの目撃例が複数含まれており、県外からの子連れクマの移入や県内での出産も考えられる。

【保全上の留意点】

2001年以降、県内での「生息」が確認されている。これは安定した個体群の存在では認められないが、愛知県におけるツキノワグマの復活を前提とした「心構え」が必要とされている。ツキノワグマが人と遭遇した際の事故を防ぐためには、クマの出没情報を機敏に広報して相互の干渉を減らす努力が必要である。また、調査、研究、広報のほかに、ツキノワグマが生息可能な森林を回復する努力を早急におこない、ツキノワグマと人との遭遇事故を起こさないようにする必要がある。

【特記事項】

種の保存法による国際希少野生動植物種。1963年に東栄町足込で捕獲されたツキノワグマの標本は田口中学校に保管されており(原田,1968)、1977年に豊田市足助地域川面で死体が発見された個体の剥製標本は愛知学院大学歯科資料展示室で展示されている。

【引用文献】

- 愛知県農林務部自然保護課, 1979. 自然環境保全基礎調査, 動物分布. 緑と光, 17: 1-7.
阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津夫, 1968. 哺乳類. 北設楽郡史原始~中世, pp.54-56.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

ホンドモモンガ *Pteromys momonga* Temminck

【選定理由】

本種は県内で著しく個体数を減少させていると考えられ、例えばかつて生息記録のあった豊田市足助地域神越溪谷における巣箱調査でも生息が確認できていない。森林環境に依存して生活している本種は自然林の縮小、個体群の分断、環境悪化によって個体数を減少させており、絶滅のおそれがある。

【形態】

頭胴長 139~195mm、尾長 95~140mm、後足長 31.5~39.0mm、耳介長 14.5~25.0mm、頭骨最大長 38.3~42.2mm (阿部,2000)。ムササビに似ているがはるかに小さい。夜行性で眼が大きい。前肢の手根部から後肢の膝にかけて飛膜を持ち、滑空することができる。切歯孔は短く、上顎頬歯列長は通常 7mm 以上。短くねじれた陰茎骨をもつ。乳頭式は 2+2+1=10 で、近縁種のタイリクモモンガより腹部の乳頭が 1 対多い。歯式は I1/1, C0/0, P2/1, M3/3=22。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡豊根村、設楽町 (旧設楽町、津具地域)、東栄町、豊橋市、豊田市 (稲武地域、旭地域、足助地域)。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

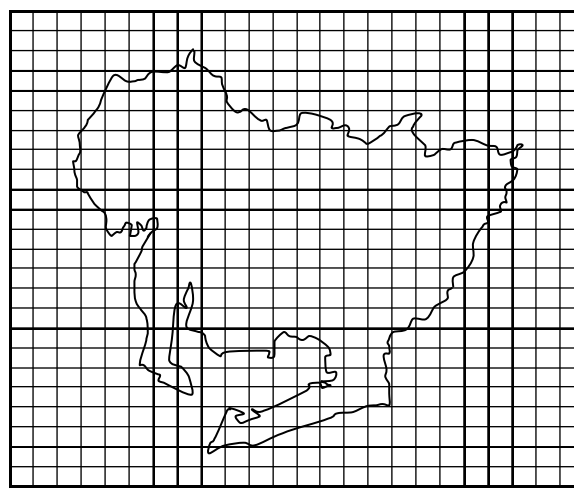
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

亜高山帯以下の山地帯森林に生息し、夜行性、樹上性で、樹上に小枝と樹皮の線維で球状の巣をつくるほか、キツキの古巣などの樹洞もよく利用する (阿部,2000)。生息する樹洞では、穴の真下の枝の分岐部などに直径 5mm 程度の黒い糞が集中して落ちている。鳥の巣箱にはいつているのがみつかるともしばしばある。樹木の葉、芽、樹皮、種子、果実、キノコなどを食べる。春から秋にかけて 1~2 回繁殖し、1 回に 2~6 仔を産む。ムササビ同様、皮膜を使った滑空で樹間を移動する。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では三河地域の 2 市 2 町 1 村で生息が認められているにすぎない。最近 20 年ほどの観察例としては、豊田市稲武地域の稲橋 (1993 年：原田,1996a)、設楽町の裏谷 (原生林)・岩古谷山・神田・八橋・田内 (1984~1994 年：原田,1996b) があるにすぎない。夜行性で目撃されにくいという性質があるにしても、記録の少なさは個体数の減少を反映していると考えられる。大木の樹洞に営巣するなど森林に依存した生活を送っているため、天然林の減少や森林内での道路建設が個体群の分断や生活環境の悪化にともなう個体数の減少をもたらしていると考えられる。

【保全上の留意点】

モモンガの分布域では生息個体群を分断する道路・ダム湖の造成や森林の無秩序な伐採・開発を避けるべきで、やむを得ない場合にも「緑の回廊」を設置したり、失われる分布面積に匹敵する代替環境造成したりして潜在植生の復元をはかるなど、個体群の分断化の影響を減らす必要がある。

【特記事項】

夏毛では背面の毛色が褐色から灰色まで中間色を介して変異に富む (今泉,1960)。愛知県では奥三河郷土館 (設楽町) や石巻自然科学資料館 (豊橋市) に展示標本があったものの、退色のため毛色は不明である。本州産では大小 2 型があるともされる (今泉,1960) がこれについても不明である。日本哺乳類学会では普通種とされている (川道,1997)。

【引用文献】

- 原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町.
今泉吉典, 1960. モモンガ属. 原色日本哺乳類図鑑, pp.109-122. 保育社, 大阪.
川道武男, 1997. リス亜目 SCIUROMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.67-75. 文一総合出版, 東京.

【関連文献】

- 宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters)

【選定理由】

ヒナコウモリはヒナコウモリ科に属する翼手類で、IUCN2003 のレッドリストでは LR/nt (準絶滅危惧) に指定されている (ただし、当時の学名 *Vespertilio superans* として)。国内では北海道、本州、四国、九州にかけて分布する樹洞性あるいは家屋性のコウモリである。愛知県では、2002 年 5 月に設楽町東納庫で最初の個体が発見され (川田,2004)、2003 年 7 月に安城市日の出町で繁殖集団の雌と幼体が見つかり (小鹿・子安,2007)、越冬集団が設楽町東納庫 (城ヶ原ほか,2007) と豊根村富山 (佐藤ほか,2008) で発見されたばかりである。

【形態】

体重 14~30g、頭胴長 60.8~80.0mm、前腕長 47~54mm、尾長 35~50mm、脛骨長 17.3~19.1mm、後足長 (爪を含む) 9.8~11.2mm、耳介長 16.2~19.2mm、頭骨最大長 16.5~17.4mm (阿部,2000)。耳介は幅広く、先端が丸い、ほぼ三角形で、耳珠も短く先端がやや広く丸い。飛膜は足の外側中央か外側趾の基部付近につく。踵骨には後葉がある (阿部,2000)。歯式は I2/3,C1/1,P1/2,M3/3=32、乳歯式は $dfI2/3, dC1/1, dP2/2=22$ で、上顎第三乳臼歯は交換しない (Koyasu & Mukohyama, 1992)。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡設楽町東納庫大桑の製材所では 2002 年 5 月 25 日に愛知県での最初の雌 1 個体が発見された (川田,2004)。その後、2005 年 11 月下旬に十数頭の越冬個体群が同じ東納庫の材木置き場で発見された (城ヶ原ほか, 2007)。この間、2003 年 7 月 7 日に安城市日の出町の 3 階建て民家で仔を含めて 100 個体ほどの繁殖・哺育集団が発見された (小鹿・子安,2007)。その後、2007 年 3 月 11 日に北設楽郡豊根村富山のトンネルで越冬する 1 個体が発見されている (佐藤ほか,2008)。

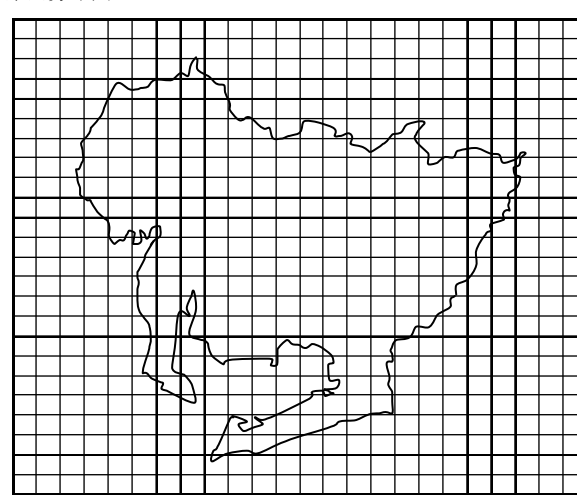
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、萩諸島、大机島で記録されている (Funakoshi, 1992 など)。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、台湾、シベリア沿海地方に分布。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

広葉樹林高木の樹洞、家屋、洞穴を利用する。雌は 100 頭をこえる出産・保育集団を形成し、初夏に通常 2 仔を産む。出生した雌はその年の秋に成熟し、満 1 歳で出産する (阿部,2000)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

2002 年 5 月に設楽町で最初の個体が発見されて以来、出産・保育集団を含めて 3 地点 4 回の生息確認がなされている。出産の際に雌の巨大な集団が形成されることから、本種が集団で移動することが示唆されている (浦野ほか,2008)。安城市日の出町 (小鹿・子安,2007) や大阪府堺市 (浦野ほか,2008) の出産・保育集団は保育終了前に民家から放逐されている。

【保全上の留意点】

近年、都市部でのヒナコウモリ観察例が増えており (たとえば、小鹿・子安,2007; 広瀬・大橋,2008; 浦野ほか,2008)、都市部での繁殖集団に対する住民の追い出しも増えると予想される。ヒナコウモリの保全に対する意識の向上が求められる。

【特記事項】

以前使用されていた学名 *Vespertilio superans* Thomas, 1899 は記載の古い現学名に変更された。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
広瀬憲也・大橋直哉, 2008. 東京都墨田区のマンションでヒナコウモリを保護. コウモリ通信, 16 (1): 13-15.
城ヶ原貴通・森部純嗣・織田統一, 2007. 愛知県設楽町におけるヒナコウモリ越冬個体群. マンモ・ス特別号, (9): 23-24.
川田伸一郎, 2004. 愛知県で記録された特筆すべき小哺乳類 2 種. マンモ・ス特別号, (6): 3-5.
Koyasu, K. & Mukohyama, M. 1992. Dental morphology of deciduous teeth in the bat, *Vespertilio orientalis*. Structure, function and evolution of teeth, pp. 115-123. Freund, London.
小鹿登美・子安和弘, 2007. 愛知県安城市におけるヒナコウモリの記録. マンモ・ス特別号, (9): 17-22.
佐藤顕義・勝田節子・山本輝正, 2008. 愛知県におけるチチブコウモリとヒナコウモリの記録. マンモ・ス特別号, (10): 25-28.
浦野信孝・米道纈夫・山本浩平, 2008. 新たに発見されたヒナコウモリのコロニー. コウモリ通信, 16 (1): 19-20.

テングコウモリ *Murina hilgendorfi* Peters

【選定理由】

本種はアジア東部に生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いが、県内では東三河山間部の 3 市町で記録されているにすぎない。洞穴内でみつかると樹冠や樹洞もねぐらにする半森林性コウモリである。県内では生物多様性の高い森林が消滅や減少によって局地的に存在するにすぎず、本種の生息を保證する良好な環境の不足が本種の個体群に絶滅の危惧をもたらしていると考えられる。

【形態】

体重 9~15g、頭胴長 57.9~73.0mm、前腕長 41~46mm、尾長 36~47mm、脛骨長 16.9~19.9mm、後足長 (爪を含む) 11.4~13.6mm、耳介長 16.8~18.4mm、耳珠長 7.0~8.5mm、頭骨最大長 18.8~20.9mm (阿部,2000)。大型のコウモリで、背面の毛色は灰褐色。銀色の刺し毛が霜降り状に体毛に混ざる。耳介は卵形で耳珠が細長い。腿間膜の上面は全体が長毛で被われている。歯式は I2/3, C1/1, P2/2, M3/3=34、脊柱式は C7+T10+L5+S5+Cd8~9=35~36 (宮尾,1974)。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡東栄町古戸 (2001 年 1 月に 2 個体: 寺西,2002)、設楽町八橋の人工洞 (2001~2003 年に各 1 個体: 橋本 肇氏)、新城市の鳳来地域 (松井ほか,1995) と玖老勢の人工洞 (2003~2005 年に最大 6 個体: 橋本 肇氏) で記録されている。

【国内の分布】

国後島 (Tiunov,1997)、北海道、本州、四国、九州。

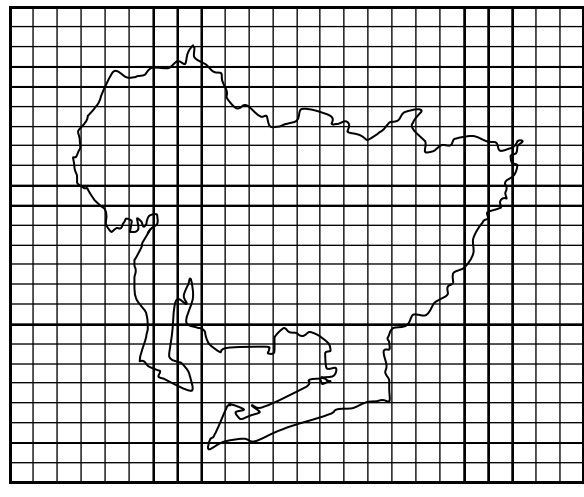
【世界の分布】

日本、サハリン、シベリア沿海地方、朝鮮島、中国。

【生息地の環境 / 生態的特性】

夏期は主に樹冠をねぐらとし、冬期には定まった樹洞や洞穴で単独ないし数頭で見つかることが多い。日没後ねぐらから出て採餌し、夜明け前に戻る。飛翔性昆虫を森林の下層部で捕食するが、地上での採餌も示唆されている (向山,2000)。初夏に 1~3 頭の仔を産むと考えられているが、国内で繁殖コロニーが発見された例は知られていない。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、ねぐらとなる樹洞のある巨木もきわめて稀である。森林の伐採や単一樹種の植林が本種の採餌場所の環境悪化をもたらす個体群の維持を困難にさせている。また、洞穴の封鎖や洞穴内の環境悪化も個体数の減少要因となっている。

【保全上の留意点】

生物多様性の高い森林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林やバットハウス (コウモリ用巣箱)・人工樹洞の設置などを推進する必要がある。また、生物相調査の際には森林性コウモリの生息可能性を常に考慮し、コウモリ類の生息状況を正確に把握するようにつとめなければならない。さらに、天然洞穴や人工洞穴に入洞規制のための柵を設置する場合にはコウモリの出入りを妨げないような設備にしなければならない。

【特記事項】

Yoshiyuki (1989) によると本種は本州・四国・九州にのみ生息する日本固有種で、学名は *Murina hilgendorfi* (Peters) であるとしている。日本哺乳類学会では希少種とされる (前田・村松,1997)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1998. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-資料-, pp.186-190. 豊川市, 豊川.
前田喜四雄・松村澄子, 1997. 翼手目 CHIROPTERA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.31-55. 文一総合出版, 東京.
宮尾嶺雄, 1974. 小翼手類の脊椎骨数. 日本哺乳類雑誌, 3: 30-31. 信州哺乳類研究会, 松本.
松井 保ほか, 1995. 哺乳類. 鳳来町誌歴史編, pp.32-35. 鳳来町, 愛知県南設楽郡鳳来町.
向山 満, 2000. ニホンテングコウモリ. 青森県の希少な野生生物, p.112. 青森県環境生活部自然保護課, 青森.
寺西敏夫, 2002. 愛知県のコウモリ:アブラコウモリを除く (1998~2002,1). マンモ・ス特別号, (4): 3-13.
Tiunov, M.P., 1997. [Chiroptera of the Far East], 134pp. Dalbnauka, Vladivostok.
Yoshiyuki, M., 1989. A systematic Study of the Japanese Chiroptera. 242pp. National Science Museum, Tokyo.

カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas)

【選定理由】

国内では石川・福島県以南の本州、四国、九州とその属島に広く分布し、県内でも12市5町で生息が認められているが、各地で市街化の進行にともなう生息地の改変により生息環境が急速に失われつつある。

【形態】

体重5.3~14.0g、頭胴長54.0~78.5mm、尾長47~91mm、後足長14~17mm、耳介長7~12mm、頭骨最大長13.7~16.9mm(阿部,2000)。体は非常に小さく、背面の毛色は赤褐色から暗褐色まで変異がある。腹面は白色。尾は長く、先端部の上面は裸出する。頭蓋では吻の短いのが特徴的であり、卵形で大きな脳頭蓋に幅の狭い頬骨弓をもつ。鼓室胞は大型で、切歯孔の後縁は第1大臼歯の前縁付近かその前方にある。乳頭式は2+0+2=8。歯式はI1/1,C0/0,P0/0,M3/3=16。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町(旧設楽町、津具地域)、豊田市(旧豊田市、稲武地域、小原地域、旭地域、藤岡町、足助地域)、新城市鳳来地域、新城市、豊川市一宮町、豊川市、豊橋市、田原市渥美地域、岡崎市、安城市(小鹿,2005)、幸田町、三好町、尾張旭市、名古屋市、北名古屋市西春町、春日井市、知多市、美浜町、南知多町。

【国内の分布】

石川・福島県以南の本州、四国、九州、隠岐道後、西ノ島、中ノ島、淡路島、豊島、因島、対馬、天草下島、福江島(高田ほか,2001)。

【世界の分布】

ユーラシア大陸に広く分布する。

【生息地の環境/生態的特性】

低地から標高1,200m付近までの山地に分布するが、低地の草地に多く、森林内にはみられない(阿部,2000)。春から秋にかけてイネ科草本やススキのような草本の茎の途中に植物の葉を細切したものを編み上げた球巣をつくり、産仔や育仔を球巣中でおこなう。1回に2~8仔を産む。冬期は地下の坑道にすむ。草本の茎葉、種子、果実、昆虫などを食べる。野外での寿命は1年あまり(白石,1965)。

【現在の生息状況/減少の要因】

本種はイネ科草本の草地に生息する特異な生活様式をもっているために、耕作の放棄された休耕地や県下各地に見られるため池周辺の草地に発達していたことが分布の広がりを保証していた(宮尾ほか,1984)。こうした休耕地や河川敷・ため池周辺での「整備」によってイネ科草本の植生が失われ、生息域が急速に失われつつある(村上・金子,1997)。

【保全上の留意点】

休耕地、河川敷、ため池などの周辺では、特に市街化にともなって整備され、結果的にカヤネズミの生息地が失われることが多い。こうした整備を行う場合は、見た目だけの美しさに固執せず、生物多様性の保全に配慮した環境整備を企画する必要がある。

【特記事項】

日本哺乳類学会では種としてのランクが「不能」とされ、生態情報が十分蓄積されていない状況が指摘されている(村上・金子,1997)。

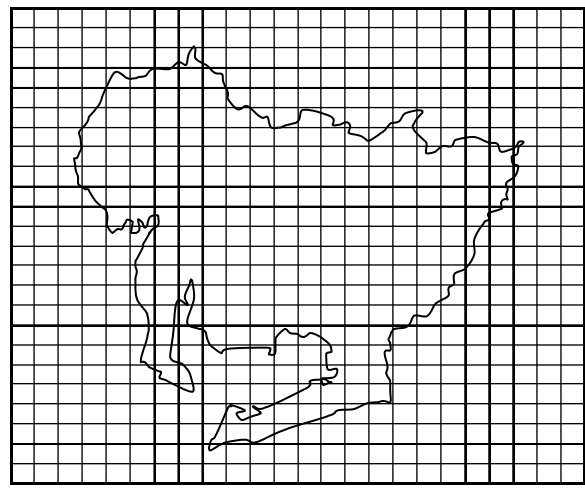
【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
村上興正・金子之史, 1997. ネズミ亜目 MYOMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.75-90. 文一総合出版, 東京.
小鹿登美, 2005. 愛知県安城市哺乳類の記録. マンモス特別号, (7): 4-9.
白石 哲, 1965. 日本の哺乳類(2)カヤネズミ属. 哺乳類科学, 8:1-13.
高田靖司・酒井英一・植松 康, 2001. 五島列島福江島と中通島における小哺乳類の採集結果とカヤネズミの特徴. 日本哺乳類学会 2001 年度大会プログラム・講演要旨集, p.74. 琉球大学理学部, 沖縄県中頭郡西原町.

【関連文献】

- 原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町.

県内分布図



カワネズミ *Chimarrogale platycephalus* (Temminck)

【選定理由】

本州と九州に広く分布し、県内でも 5 市町で生息が認められているが、半水生哺乳類である本種は溪流や小河川に依存して生活しており、生物多様性に配慮しない護岸工事や生活排水の流入など本種の生息環境の悪化によって個体群の維持が困難になっていると考えられる。

【形態】

体重 24~56g、頭胴長 94~144mm、尾長 87~113mm、後足長 23.0~27.7mm、耳介長 6.2~11.0mm、頭骨最大長 25.8~28.2mm。水生に適応した大型のトガリネズミで、前肢・後肢の指の間にある剛毛が水中で水かきの役割をはたしている。頭骨の脳頭蓋は扁平で口吻前方に尖っている。歯の咬頭の先端には赤い着色がない。歯式は通常 I3/1, C1/1, P1/1, M3/3=28 とされている。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市 (旧豊田市、稲武地域、旭地域、小原地域、藤岡町、足助地域、下山地域)、設楽町、三好町、岡崎市額田町、犬山市 (原田, 1996a,b ; 子安ほか, 2001)。

【国内の分布】

本州と九州に分布する。四国では後期更新世以降絶滅したと考えられる (子安, 1998)。

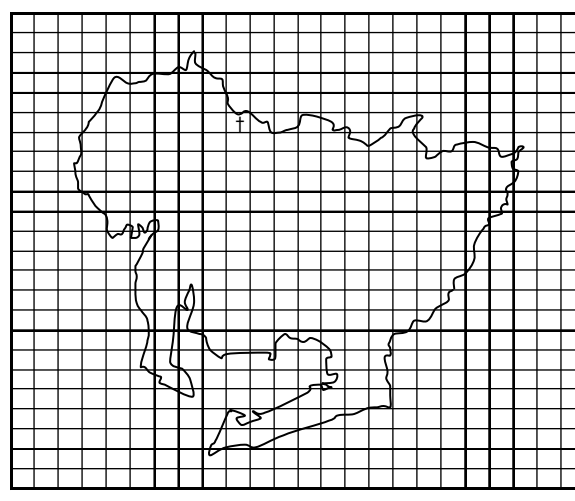
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山間部の溪流と丘陵部の小河川に生息する。巧みに水泳・潜水してトビケラの幼虫のような水生昆虫、サワガニ、魚類、カエルなどを捕食する。繁殖期は春と秋で、1 回に 2~5 仔を産む。巣は河畔の土中や石の下につくる。3 年以上生息する個体もいる。山間部の養魚場で飼育されている溪流魚をねらって出没することもある。水中を泳ぐ際には体表を被う毛皮の間に空気の泡を含み、これが光を反射するので「銀の矢」が水中を駆け抜けていくように見える。小河川を中心に存在するホームレンジ内では定期的に上流と下流に向かって移動を繰り返しているが、淵への落ち込みが急な箇所では岸に上陸して急流を迂回する性質がある。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

現時点でカワネズミの生息することに疑問がない愛知県の河川は、矢作水系 (名倉川・神越川・巴川・乙川・男川など) と豊川水系 (源流部) の 2 水系にすぎない。水生動物の生息に配慮しない護岸工事や河川改修はカワネズミの生息を不可能にしており、また生活排水の流入などによる河川の汚濁もカワネズミの絶滅域を拡大することによって個体数を減少させている。

【保全上の留意点】

里山に近い山間部での小河川や溪流における河川改修・護岸工事・農薬散布に際してはカワネズミの生息可能性を念頭に置いた施工が必要である。カワネズミそのものに対する知識不足 (例えばカワネズミは「ネズミ」の属する齧歯目ではなく食虫目に属することなど) や水生哺乳類としての生態特性から、各河川での生息が知られることなく絶滅する可能性があるため注意が必要である。

【特記事項】

天明年間 (1781~1789) に成立した内藤東甫の『張州雑誌』にカワネズミの図がある。「水野沓掛邊 (現在の瀬戸市定光寺町近辺) 谷川處々有...」という記述から、最近の記録に乏しい尾張平野丘陵部にも 18 世紀後半にはカワネズミが少なからず生息していたことがわかる。

【引用文献】

- 阿部 永, 2003. カワネズミの捕獲, 生息環境および活動. 哺乳類科学, 43(1): 51-65.
原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.
子安和弘, 1998. 日本産トガリネズミ亜科の自然史. 食虫類の自然史, pp.201-267. 比婆科学教育振興会, 広島県庄原市.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.
森部純嗣・織田銃一, 2007. 愛知県北設楽郡設楽町のカワネズミにおける諸事情. マンモス特別号, (9): 6-9.

アズマモグラ *Mogera imaizumii* (Kuroda)

【選定理由】

国内では本州中部以北で連続した分布を示すが、中部以南では不連続で孤立した個体群となっている。県内では1984年まで生息が知られていなかったが、最近の発見は以前考えられていたより広い地域で発見されることを示している。しかし、本県の分布域は本州北部個体群の最南端にあり、特に平地や丘陵地の小個体群は孤立していて、こうした小個体群は絶滅する危険性が高い。

【形態】

体重48.0~127.0g、頭胴長121.0~159.0mm、尾長14.0~22.0mm、後足長15.5~22.5mm、頭骨最大長31.5~38.5mm(阿部,2000)。小型~中型のモグラであるが、体の大きさの地理的変異が著しい。愛知県内のアズマモグラは小型である。頭骨は吻部が比較的狭く、眼窩部の膨らみが大きい。上顎の切歯列はV字型かU字型をしており、円弧状の配列を示すコウベモグラと異なる。歯式はI3/2,C1/1,P4/4,M3/3=42、脊柱式はC7+T14~15+L4~5+S6+Cd11~12=44。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村(原田,1998)、豊田市(旧豊田市、稲武地域：子安ほか,2001)、設楽町(原田,1996；川田・姫田,2001)、新城市鳳来地域(原田,1998)、豊川市(原田,1998)、犬山市、瀬戸市(子安ほか,2001；子安,2007)、美浜町(宮尾ほか,1984)。

【国内の分布】

本州、四国、粟島、能登島、小豆島。

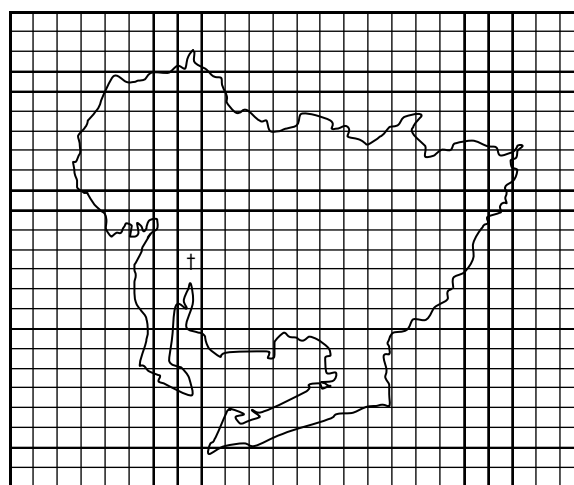
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

国内の主要な分布地である本州中部以北では、低地から低山帯の平野部の草地、耕地、森林などに多く、高標高地の草原にも生息する。愛知県内では、山地ないし丘陵地の土壌の発達の悪い場所に生息しているが(子安ほか,2001)、山地のゴルフ場内でコウベモグラと微妙なすみ分けをしている場所もある(川田・姫田,2001)。餌としてはミミズ類と昆虫類が多い。春に主要な繁殖期があり1回に2~6仔を産む。寿命は3年あまり。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では8市町村の14地点で確認されているにすぎない。奥三河の豊根村、豊田市稲武地域、設楽町、新城市鳳来地域では分布が連続している可能性があるが、他の地点は孤立した個体群の可能性が高い。丘陵地や平地の個体群は孤立している可能性が高い。個体群の分断・孤立化や対抗種であるコウベモグラの侵入を許すような土壌改良をとともなう開発が個体数を減少させると考えられる。

【保全上の留意点】

本種の分布域は対抗種であるコウベモグラの分布域と部分的に重複しており、両種が生息する場所では土壌が浅く環境条件の悪いところにアズマモグラが生息する傾向がある。したがって、土壌条件の悪い丘陵地や山地での開発の際は、アズマモグラの生息する可能性を常に検討し、本種の生息が確認された際には、生息域の分断を回避し、土壌条件を改変しないように留意すべきである。

【特記事項】

刈谷市天王町の本刈谷貝塚(晩期縄文時代)から出土したモグラの上腕骨は「やや小型で...アズマモグラのそれをみるような大きさ」であったという(直良,1972)。この遺跡遺存骨がアズマモグラのものであることが証明されれば、現在、知多半島、瀬戸市、設楽町でコウベモグラと拮抗しているアズマモグラの分布域が、縄文の寒冷期から現在までにやや縮小したといえるだろう(子安,2007)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1996. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町.
原田猪津男, 1998. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-本文-, pp.365-370. 豊川市, 豊川.
川田伸一郎・姫田 始, 2001. 愛知県設楽町東納庫カトリック教会内でのモグラ2種の分布調査. マンモス特別号, (3):49-52.
子安和弘, 2007. 哺乳類. 海上の森の自然史, pp.115-128. あいち海上の森センター, 瀬戸市.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3):19-34.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
直良信夫, 1972. 本刈谷貝塚発掘の脊椎動物遺体. 本刈谷貝塚, pp.88-92. 刈谷市教育委員会, 刈谷市.

モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck)

【選定理由】

本種は極東に限局して生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いが、県内では東三河山間部を中心とする2市2町で生息が認められているにすぎない。本種もキクガシラコウモリと同様の洞穴性コウモリであるが、良好な環境を保った森林への依存性がキクガシラコウモリやコキクガシラコウモリ以上に高いと考えられる。生物多様性の高い、良好な環境を保った森林の消滅や減少が本種の採餌場所や生活場所の不足をもたらし、個体群の維持を困難にさせていると考えられる。

【形態】

体重5.5～11.0g、頭胴長44～63mm、前腕長34～41mm、尾長32～45mm、脛骨長15.2～17.0mm、後足長(爪を含む)10.0～11.8mm、耳介長14.0～16.8mm、耳珠長4.5～6.0mm、頭骨最大長14.2～15.6mm。中型のコウモリで後足が長く、脛骨の半分以上の長さになる。背面の毛色は黒褐色で肛門から足にかけて白い毛がある。耳介と耳珠は細長く、頭骨は比較的細長い。歯式はI2/3, C1/1, P3/3, M3/3=38、脊柱式はC7+T10+L5～6+S5+Cd8～9=35～37(宮尾,1974)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市桑原町(原田,1996a;寺西,2002)、設楽町清崎(原田,1996b;2006年12月に4メッシュで19個体:橋本肇氏)、東栄町赤羽根(寺西,2002)、新城市田代の廃隧道(3個体以上:寺西,2002)と新城市玖老勢の人工洞(2006年12月に7個体:橋本肇氏)で生息記録がある。尾張地区では犬山市の愛知用水で初めて分布が確認された。

【国内の分布】

国後島(Tiunov,1997)、北海道、本州、四国、九州、佐渡島、対馬に生息する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、サハリン、シベリア沿海地方。

【生息地の環境 / 生態的特性】

昼間は洞穴で休息し、数頭から数十頭の群をつくる。冬期には定まった冬眠洞で群を形成して冬眠する。日没後に出洞して採餌し、夜明け前に戻る。食物は小型の飛翔性昆虫で、森林やその周辺、河畔などで採餌する。森林では樹幹の間や樹冠部で採餌しているらしい。仔は生後25～35日で飛翔可能になり、生後16ヶ月で性成熟に達する。雌は初夏に特定の洞穴で1仔を産む。寿命は6年以上。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

森林の大面積伐採や単一樹種の植林による生物多様性の減少が本種の良好な採食場所を減少させていると考えられる。さらに、生物多様性の保全に配慮しない河川改修、河畔周辺の開発、利用可能な洞穴の消滅といった要因で本種の生活可能な環境が減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息地周辺では、伐採、下刈り、農薬散布により生息環境が破壊されないよう十分な配慮が求められる。また、天然洞穴や人工洞穴の荒廃・攪乱を避け、これらに柵を設置する場合にはコウモリの出入りが可能な設備にしなければならない。

【特記事項】

1993年9月に豊田市稲武地域稲橋の排水路内で「モリアブラコウモリ」が発見され、撮影されている(原田,1996a)。しかし、原田猪津男氏のご好意によって検討できた所蔵標本の中には撮影された個体を発見できず、該当する標本による検討ができなかったため、その生息確認を留保した。

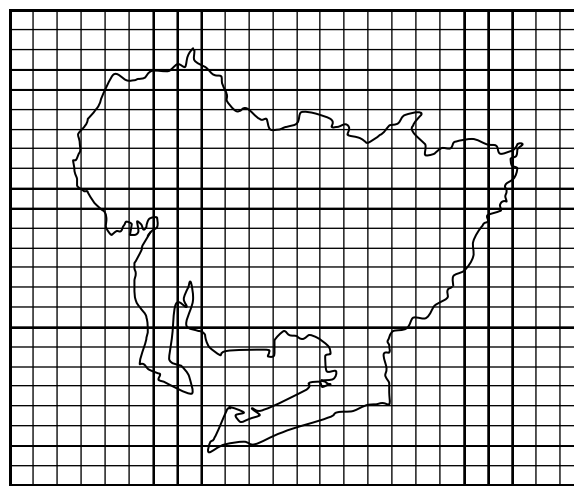
【引用文献】

- 原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 本文編, pp.508-513. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.
宮尾嶽雄, 1974. 小翼手類の脊椎骨数. 日本哺乳類雑誌, 3: 30-31. 信州哺乳類研究会, 松本.
寺西敏夫, 2002. 愛知県のコウモリ:アブラコウモリを除く(1998～2002.1). マンモ・ス特別号, (4): 3-13.
Tiunov, M.P., 1997. [Chiroptera of the Far East], 134pp. Dalbnauka, Vladivostok.

【関連文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモ・ス特別号, (3): 19-34.
前田喜四雄, 1994. コウモリ目 CHIROPTERA. 日本の哺乳類, pp.37-70. 東海大学出版会, 東京.

県内分布図



ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck)

【選定理由】

ムササビの生活はスギ林に依存しており、都市近郊では社寺林として残された杉林を主な生活場所としている。こうした社寺林はたとえ境内の樹木が保存されていても、その周囲が宅地化などによって開発されたり、飛び移れる樹木が失われることによって生活可能域の分断・孤立化が起り、地域個体群が分断・縮小・絶滅へすすむと考えられる。

【形態】

頭胴長 340～483mm、尾長 280～414mm、後足長 60.5～71.0mm、耳介長 35～43mm、頭骨最大 66.0～68.6mm (阿部,2000)。大型でモモンガ同様、前肢の手根部から後肢の膝にかけて飛膜を持ち、滑空することができる。背面の毛色は褐色系であるが地域によって変化し、腹面は白色。切歯孔はきわめて小さく、歯隙長の 1/2 以下。下顎の角突起は幅広いが、モモンガのようにねじれない。歯式は I1/1, C0/0, P2/1, M3/3=22。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村富山地域、豊根村、設楽町、東栄町、豊田市 (旧豊田市、稲武地域、下山地域、足助地域、藤岡町、小原地域、旭地域)、新城市 (鳳来地域、作手地域)、岡崎市額田町、豊川市、豊橋市、瀬戸市、犬山市。田原市郷中の伊川津貝塚 (縄文時代後～晩期) から出土している (山崎・織田,2005)。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

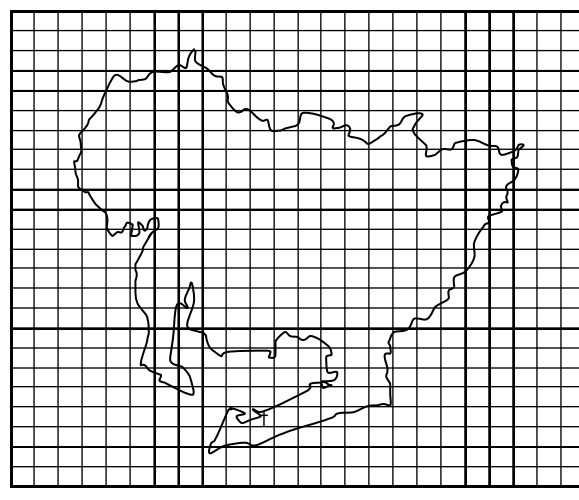
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

低地から亜高山帯までの山地帯森林に生息し、夜行性。樹上で、樹洞もよく利用するほか、樹上につくった球状の巣を利用する (阿部,2000)。樹木の葉、芽、花、果実、樹皮、種子などをたべる。生活はスギ林に依存しており、スギの樹皮は巣材としても食用にも用いられ、雄花と若枝の根元は特に好んで食べる。冬と初夏に交尾し、74 日ほどの妊娠期間をへて、1 回に 1～2 仔を産む。雄が生殖可能になるまで 2 年近く必要 (Kawamichi,1997)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での分布は比較的広く、7 市 2 町 2 村で生息が認められている。都市近郊ではスギの大木のある社寺林で生息の認められることが多く、こうした場所ではスギの樹皮の剥皮跡が認められたり、糞や若枝の先端が落ちていたり、板壁に穴があげられているのでムササビの生息が確認できる。スギ林に依存した生活を送っているために、スギ林そのものやその周囲の森林や林の伐採はムササビの移動を制限して隣接する個体群との遺伝的交流を減らして孤立化させ、ついには絶滅に至ると考えられる。

【保全上の留意点】

周囲に森林や林の存在しない島状の生息地 (例えば都市近郊の社寺林で周囲が田畑や宅地に囲まれている場所) となるような生息場所では樹木の伐採によってムササビの移動が制限されないように留意すべきである。

【特記事項】

日本哺乳類学会では普通種とされている (川道,1997) が、1994 年度からは狩猟獣から除外されてニホンリスと同様に狩猟対象ではなくなった。

【引用文献】

- 原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町.
川道武男, 1997. リス亜目 SCIUROMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.67-75. 文一総合出版, 東京.
Kawamichi, T., 1997. The age of sexual maturity in Japanese giant flying squirrel, *Petaurista leucogenys*. Mammal Study, 22: 81-87.
山崎 健・織田統一, 2005. 愛知県における遺跡出土の食虫類・齧歯類(縄文時代～弥生時代). マンモ・ス特別号, (7): 10-16.

【関連文献】

- 宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

ヤマネ *Glirulus japonicus* (Schinz)

【選定理由】

日本固有種で、国内でも本州、四国、九州、隠岐島後の限られた地域にしか生息しない。各地域個体群は分断化・孤立化しており、県内の小個体群同士および隣接県の個体群が連続的な分布をしている証拠はなく、個体群の孤立化と生活環境の悪化により個体数が減少していると考えられる。

【形態】

体重 12.7~23.0g、頭胴長 59~84mm、尾長 33~54mm、後足長 15~17mm、耳介長 6~9mm、頭骨最大長 23.5~24.6mm (阿部,2000)。四肢が短く体型はハムスターに似ているがリスに似た扁平な尾をもつ。淡褐色をした背面の正中には黒い線があり、腹面の色はやや淡い。夏毛では背面の毛色は灰色から褐色まで種々の中間型を介在させて変異に富む (今泉,1960)。耳介は短くほとんど体毛に埋まる。盲腸をもたない。頭骨では吻は長いものの切歯孔は小さい。乳頭式は 2+1+1=8 または 2+0+1=6。歯式は I1/1,C0/0,P1/1,M3/3=20。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村、設楽町 (旧設楽町、津具地域)、豊田市 (稲武地域、小原地域、旭地域、下山地域)、岡崎市額田町。

【国内の分布】

本州、四国、九州、隠岐島後に分布する。

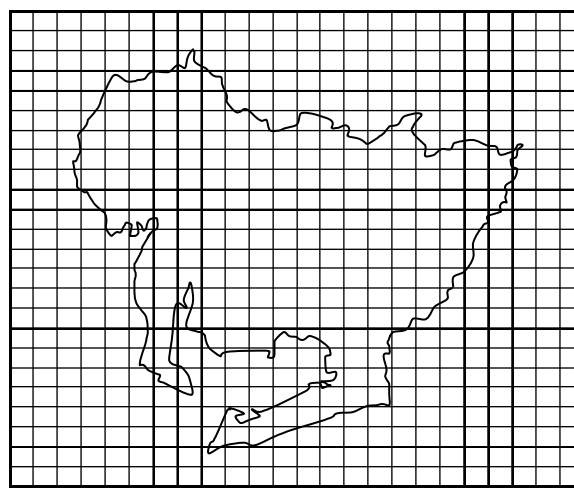
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

亜高山帯以下の山地天然林にすみ、樹上性が強く、夜行性で、樹洞や樹上に苔や樹皮などで巣をつくる (阿部,2000)。冬期には完全な冬眠をおこなう。冬眠場所は樹洞の巣や樹皮の割れ目、落葉や土中などである。果実、種子、昆虫などを食べる。春から秋にかけて繁殖し、2~7 仔を産む。妊娠期間は 3 週間。小鳥のための巣箱にはいることが知られているが、この中で冬眠はしない。ゴルフ場内の残地林の巣箱を利用した例も知られている (中島,2001 参照)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

全国のヤマネの分布状況をまとめた中島 (2001) によると、愛知県のヤマネは長野県最南端の小個体群とわずかにつながるので、南アルプスの個体群から孤立している可能性がある。既知の分布情報から、県内の小個体群の孤立化は明らかで、道路やダム造成などによる小個体群の分断と森林伐採が生息環境の悪化と分布面積の減少をもたらす、個体数を減少させていると考えられる。

【保全上の留意点】

ヤマネの分布域では生息個体群を分断する道路・ダム湖の造成や森林の無秩序な伐採・開発を避けるべきで、やむを得ない場合にも個体群の分断化の影響を減らす回廊の設置 (湊,2000) や、失われる分布面積に匹敵する代替環境造成として潜在植生の復元などをはかる必要がある。

【特記事項】

毛色には地理的変異があり、山梨産は灰色、和歌山産は茶色、長崎産は濃い茶色になっている (湊,2000)。また、西日本産 (福井県、和歌山県、高知県) と中部産 (山梨県、長野県) ではヤマネの塩基配列が大きく異なり、200 万年程度の分岐年代に相当するという (Suzuki et al.,1997)。日本哺乳類学会では危急種 (村上・金子,1997)、文化財保護法による天然記念物。

【引用文献】

- 湊 秋作, 2000. ヤマネって知ってる? ヤマネおもしろ観察記, 126pp. 築地書館, 東京.
村上興正・金子之史, 1997. ネズミ亜目 MYOMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.75-90. 文一総合出版, 東京.
中島福男, 2001. 日本のヤマネ, 169pp. 信濃毎日新聞社, 長野.
Suzuki, H., S. Minato, S. Sakurai, K. Tsuchiya, I.M. Fokin, 1997. Zoological Science, 14:167-173.

【関連文献】

- 原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards)

【選定理由】

本州、九州、佐渡島、能登島にのみ生息する日本固有種であるが、近年の市街化にともなってその生息環境が急速に失われつつあり、生息域と生息数の減少がいちじるしい。

【形態】

体重22～62g、頭胴長95～136mm、尾長29～50mm、後足長16.5～20.4mm、耳介長10.0～12.2mm、頭骨最大長25.5～29.2mm(阿部, 2000)。背面の毛色は黄褐色から灰黄褐色まで変異があり、腹面は灰白色。後足底の蹠球数は5個と6個の場合があり、前者が多い。体の大きさは南方のものが北方のものより大型化する傾向がある。骨口蓋の後端にはヤチネズミやスミスネズミにはない窪みがある。大臼歯は生涯無根。乳頭式は通常2+0+2=8。歯式はI1/1, C0/0, P0/0, M3/3=16。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村、豊田市(旧豊田市、小原地域、稲武地域)、設楽町、田原市(赤羽根町、渥美地域)、三好町、幸田町、西尾市、犬山市、名古屋市、知多市、江南市、北名古屋市、愛西市、春日井市、豊川市一宮町、稲沢市祖父江町、東浦町(鳥居, 2000)、安城市(小鹿, 2005)。

【国内の分布】

本州、九州、佐渡島、能登島に分布。

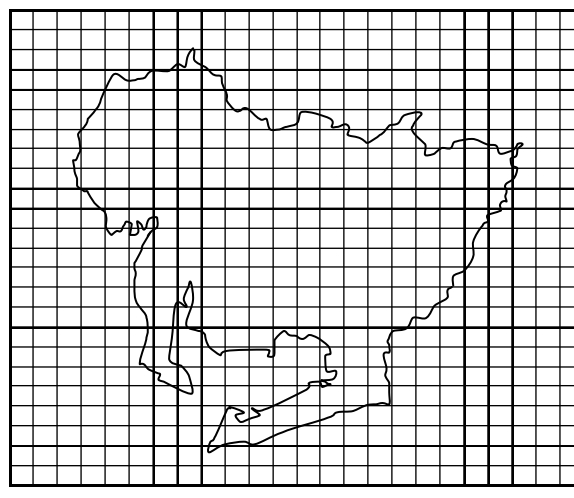
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

低地から高山にまで分布し、広葉樹林や針葉樹林にも見られるが、低地の農耕地を含む草原的環境に最も多い(阿部, 2000)。地下性が強く、地表直下にトンネルを掘って生活している。植物食に最も適応したネズミ類で、草本類やその根、根茎などを食べる。繁殖期は北方や高標高地では夏を中心とした1山型であるが、南方では春と秋の2山型で、1回の妊娠で1～9仔、通常3～5仔を産む(金子, 1975)。愛知県内での詳しい生態は不明。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

大正から昭和の初年にかけては、ハタネズミはハツカネズミとともに県下の平野部を代表する野ネズミであった(青木, 1926)。現在では個体数がきわめて少なくなっており(宮尾ほか, 1984)、これは市街化の進行による生息地の減少が主因と考えられるが、ユーラシア北部のタイガ地域と台湾高地に類縁を持つ北方系の種なので地球温暖化の影響を受けている可能性も考えられる。

【保全上の留意点】

牧草地を含む草原、造林地、河川敷・耕地とその周辺の草地在がハタネズミの主要な生息地であるが、市街地周辺ではこうした環境が急速に整備され失われつつある。こうした場所での環境整備に際しては格段の配慮が必要であり、地域個体群の絶滅をもたらさないようにしなければならない。

【特記事項】

ハタネズミは日本の4つの島にのみ生息する固有種であるが、染色体からみた最近縁種は台湾の高地にのみ生息する固有種のキクチハタネズミ *Microtus kikuchii* とユーラシア大陸北部に分布するツンドラハタネズミ *M. oeconomus* であることが最近の研究で示された(Mekada, et al., 2001)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
青木文一郎, 1926. 名古屋市及其郊外に棲息する鼠類の観察. 動物学雑誌, 38: 341-346.
金子之史, 1975. 日本の哺乳類(12)齧歯類ハタネズミ属. 哺乳類科学, 30:3-26.
Mekada, K., M. Harada, L.K. Lin, K. Koyau, P.M. Borodin and S.-I. Oda, 2001. Pattern of X-Y chromosome pairing in the Taiwan vole, *Microtus kikuchii*. Genome, 44: 27-31.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
小鹿登美, 2005. 愛知県安城市哺乳類の記録. マンモス特別号, (7): 4-9.
鳥居春友, 2000. 哺乳類. 新編東浦町史資料編2(自然), pp.190-200. 愛知県知多郡東浦町, 東浦町。

【関連文献】

- 原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史-自然-資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町。

スミスネズミ *Myodes smithii* (Thomas)

【選定理由】

日本固有種で、本州の南方と四国、九州、隠岐島後に生息するが、県内では三河地域の4市1町1村と尾張地域の1市で生息が認められるにすぎない。森林とその周辺に生息し、山地での道路建設やダム造成によって個体群が分断されやすく、縮小・孤立化した小個体群が絶滅する可能性がある。

【形態】

体重20~35g、頭胴長75~115mm、尾長33~55mm、後足長16.0~18.5mm、耳介長10.0~13.5mm、頭骨最大長22.0~25.7mm(阿部, 2000)。背面の毛色は赤褐色から黄褐色まで変異があり、腹面は黄褐色。体の大きさは南方のものが北方のものより大きくなる傾向がある。短い尾を持ち、尾率は通常40~60%の範囲にある。頭蓋はやチネズミより小さく、鼓室胞はやや小さく扁平。大白歯は生涯無根。乳頭式は0+0+2=4または1+0+2=6。歯式はI1/1, C0/0, P0/0, M3/3=16。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村(旧豊根村、富山地域)、設楽町(旧設楽町、津具地域)、豊田市(旧豊田市、稲武地域、旭地域、小原地域、下山地域)、新城市(鳳来地域、作手地域)、豊川市一宮町、岡崎市額田町、瀬戸市。

【国内の分布】

新潟・福島県以南の本州、四国、九州、隠岐島後に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

低地から高山までの森林およびその周辺にすみ、落葉・腐食層の厚い湿潤な環境に多い(阿部, 2000)。草本類の葉や茎に加え、種子などを菜食する。繁殖期は地域によって異なり、南方では春と秋の2山型、北方では夏の1山型となっており、1回に1~6仔、通常2~3仔を産む(金子, 1992a; 宮尾, 1967)。天然林に多く、人工造林地にはほとんど生息しない(金子, 1992b)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

愛知県内の分布は大半が三河地域で、尾張地域では瀬戸市にのみ生息が認められる。三河地域の個体群は連続的なものが多いと考えられるが、瀬戸市の個体群が三河地域の個体群と連続的な分布をしているか現時点では不明である。減少の要因としては、道路造成、ダム湖の造成、伐採や開発にともなう森林面積の減少などがあげられる。

【保全上の留意点】

沖積平野や主要国道はスミスネズミの分布障壁となる(金子, 1992b)から、個体群分断化のおそれのある地域での森林面積の減少や分断をともなう開発は個体群の分断と個体数の縮小をまねくおそれがある。個体群の分断をもたらさないような回廊の設置や、失われる可能性のある分布面積に匹敵する代替環境造成として潜在植生の復元などをはかる必要がある。

【特記事項】

日本哺乳類学会では危急種とされ、なかでも「愛知県尾張」の個体群は「保護すべき地域個体群」のひとつに指定されている(村上・金子, 1997)。

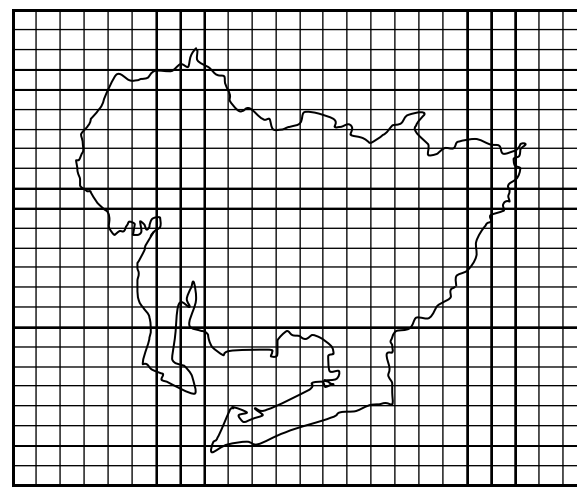
【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
金子之史, 1992a. 日本の哺乳類(17)スミスネズミ. 哺乳類科学, 32: 39-54.
金子之史, 1992b. 四国における野ネズミ3種の地形的分布. 日本生物地理学会会報, 47: 127-141.
宮尾嶽雄, 1967. 日本列島における小哺乳類の地理的変異に関する研究I. スミスネズミの地理的変異第2報. 後足長, 尾長, 仙尾椎骨数および繁殖活動の地理的変異. 成長, 6: 7-18.
村上興正・金子之史, 1997. ネズミ亜目 MYOMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.75-90. 文一総合出版, 東京.

【関連文献】

- 原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史-自然-資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

県内分布図



コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* Temminck

【選定理由】

日本の特産種で全国的には分布が広いが、県内では7市町村で生息が認められているにすぎない。本種はキクガシラコウモリと同様の洞穴性コウモリであるが、冬眠や出産に使用できる適切な洞穴の条件がキクガシラコウモリ以上に制限されていると考えられる。こうした洞穴の消滅や適当な採餌場所の不足が個体群の維持を困難にさせていると考えられる。

【形態】

体重4.5～9.0g、頭胴長31.5～50.0mm、前腕長36～44mm、尾長16～27mm、脛骨長16.5～18.0mm、後足長(爪を含む)8.0～9.5mm、耳介長14～19mm、頭骨最大長14.8～17.5mm(阿部,2000)。キクガシラコウモリと同様の鼻葉をもつが、はるかに小型。鼻葉は前葉が小さく、中央突起が高く横からみると先端が細く尖っている。骨口蓋後縁は正中部が後方に突出している。歯式はI1/2,C1/1,P2/3,M3/3=32、脊柱式はC7+T12+L5+S5+Cd8～10=37～39(宮尾,1974)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村、設楽町(旧設楽町、津具地域)、新城市鳳来地域、豊橋市、豊田市、犬山市、瀬戸市で記録されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、三宅島、御蔵島、八丈島、対馬、壱岐島、福江島、屋久島、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島。

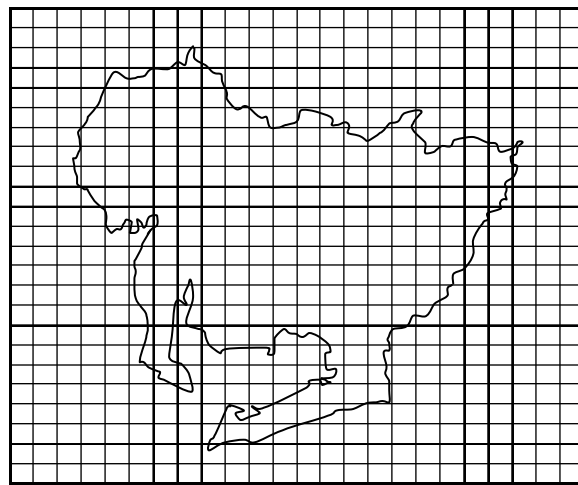
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境 / 生態的特性】

洞穴性のコウモリで、昼間は数十頭から百頭を越える群で休息する。冬期には定まった冬眠洞で数頭から千頭を越える群で冬眠する。日が暮れてから出洞して採餌するが、真夜中には休憩する。食物は主として小型の飛翔性昆虫で、水面や地面すれすれの場所で採餌する。雌は生後3年から繁殖し、初夏に特定の洞穴で1仔を産む。仔は約25日で飛翔可能になる(前田,1994)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

森林の大面積伐採とその後の単一樹種の植栽が生活場所である森林内の生物多様性を低下させ、可能な採食場所を減少させていると考えられる。さらに、出産や冬眠に使用可能な適切な洞穴の消滅や洞穴環境の悪化のために個体数が減少していると考えられる。キクガシラコウモリが洞穴の比較的入り口に近い部分を利用するのに対してコキクガシラコウモリは洞穴の深部を利用するのが普通であり(阿部,2000)、このことが本種の利用可能な洞穴をさらに減少させていると考えられる。

【保全上の留意点】

1年を通じて冬眠洞、出産・育仔洞、春と秋のねぐら洞が必要であるのはキクガシラコウモリと同様である。こうした洞穴の破壊や環境悪化をもたらす開発や洞穴の荒廃・攪乱を避けなければならない。特に出産・育仔洞や冬眠洞の周辺においては森林ならびに河川周辺の環境を本種の生息が可能であるように保全しなければならない。また、本種の生息する洞穴に柵を設けて人の出入りを制限する際には、横棒を主体とする柵にしてコウモリの出入りを可能にしなければならない。

【特記事項】

県内の分布地のうち、設楽町津具地域、豊橋市、犬山市、瀬戸市については寺西敏夫氏ほかの実地調査によって確認されている。豊根村については原田(1989)が、設楽町と豊田市については宮尾ほか(1984)が記述している。新城市鳳来地域については愛知教育大学に標本が存在する。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1989. ほ乳類. 豊根村誌, pp.33-38. 豊根村, 愛知県北設楽郡豊根村.
前田喜四雄, 1994. コウモリ目 CHIROPTERA. 日本の哺乳類, pp.37-70. 東海大学出版会, 東京.
宮尾嶽雄, 1974. 小翼手類の脊椎骨数. 日本哺乳類雑誌, 3: 30-31. 信州哺乳類研究会, 松本.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

- 子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモ・ス特別号, (3):19-34.

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber)

【選定理由】

全国的に分布が広く、県内でも 12 市町村で生息が認められているが、洞穴性コウモリである本種は冬眠や出産に使用できる適切な洞穴が必要であり、こうした洞穴の消滅や採餌場所の環境悪化によって個体群の維持が困難になっていると考えられる。

【形態】

体重 17~35g、頭胴長 53~82mm、前腕長 52~65mm、尾長 28~45mm、脛骨長 24.5~26.2mm、後足長 (爪を含む) 11~15mm、耳介長 22.5~28.0mm、頭骨最大長 19.9~25.5mm。小翼手亜目の中では大型のコウモリであり、「菊の花」にみたてられた特異な形態の鼻葉をもつ。鼻葉の中央突起は低く、横から見ると先端が丸くなっている。骨口蓋後縁は滑らかな円弧状。歯式は I1/2, C1/1, P2/3, M3/3=32、脊柱式は C7+T12+L5+S5+Cd8~10=37~39。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋守山区、豊根村、設楽町、東栄町、豊田市 (稲武地域、足助地域、藤岡町)、新城市 (旧新城市、鳳来地域)、豊橋市、田原市田原町、幸田町、西尾市、瀬戸市、犬山市。

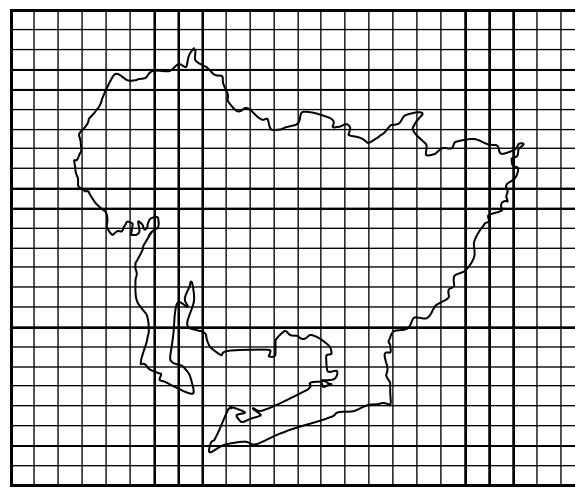
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆大島、三宅島、八丈島、佐渡島、対馬、五島列島、屋久島での分布が知られている。

【世界の分布】

日本からアジア中南部をへてヨーロッパとアフリカ地中海沿岸。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

昼間は海食洞、洞穴、トンネル、家屋などに数頭 (時に 1 頭) から数百頭の群で休息する。冬期には冬眠洞の天井から懸垂して冬眠する。夜間に単独で飛行しながら主として昆虫を捕食する。採餌場所は、森林や森林に隣接した小丘陵、河川、草原、平地などである。採餌活動は夕暮れと夜明けで、真夜中に特定の休息場所で休息する。交尾は秋におこなわれるが、精子は雌の生殖道内に貯蔵され冬眠から覚めてから受精する。雌は特定の出産洞で出産集団を形成して初夏に 1 仔を生む (阿部, 2000)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

大面積伐採によって森林域の採食場所減少に加え、出産や冬眠に使用される洞穴の消滅や洞穴環境の悪化のため個体数が減少していると考えられる。また、体が大きいことから必要とされる食餌量も多量になり、餌となる昆虫が質量ともに良好に保たれねばならず、そのための森林を中心とした生物多様性が求められているが、開発や単一植栽によって生活環境の質が低下している。

【保全上の留意点】

洞穴性コウモリは 1 年の生活サイクルを通じて多種の洞穴 (冬眠洞、出産・育仔洞、春と秋のねぐら洞) を利用する。こうした洞穴の破壊や環境悪化を防ぐように留意するとともに、特に出産・育仔洞や冬眠洞の周辺での開発に際しては森林伐採や河川周辺の環境変化による採餌環境の破壊を避けなければならない。また、本種の生息可能な洞穴は天然・人工を問わず、これを完全に閉鎖しないととも、横棒を主体とした柵によってコウモリの出入りの確保に十分配慮する必要がある。

【特記事項】

県内分布地のうち、設楽町、東栄町、豊田市 (稲武地域)、新城市、豊橋市、瀬戸市、犬山市については寺西敏夫氏ほかの調査によって確認されている。豊根村、豊田市 (足助地域、藤岡町)、幸田町、西尾市については子安ほか (2001) が、田原市田原町については内藤 (1983) が記述している。

【引用文献】

阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.
内藤和志, 1983. 三遠の洞穴. 地底の音, pp.22-35. 三遠洞くつ研究会, 松本.

【関連文献】

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
前田喜四雄, 1994. コウモリ目 CHIROPTERA. 日本の哺乳類, pp.37-70. 東海大学出版会, 東京.
前田喜四雄・松村澄子, 1997. 翼手目 CHIROPTERA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.31-55. 文一総合出版, 東京.

テン *Martes melampus* (Wagner)

【選定理由】

テンは国内の主要な島々と朝鮮半島南部にのみ生息するが、現在の県内での分布は三河地域の山間部に限られ、知多半島・渥美半島および平野部では絶滅したと考えられる。三河地域での分布は比較的広いが、今後森林域の縮小や生活環境の悪化にもなって個体数が減少する可能性がある。

【形態】

頭胴長 410~490mm、尾長 170~233mm、後足長 75~98mm、耳介長 31.5~45.0mm、頭骨最大長 78.9~91.8mm (阿部,2000)。尾率は 40%以上となるのが普通。性的二型があり、雄は雌より大きい。毛色はあざやかな黄色から褐色のもので変異に富み、黄色のものはキテン、褐色のものはステンと一般に呼ばれている。頭蓋では比較的吻が長く幅が狭い。雄では脳頭蓋の正中部に明らかな矢状稜が認められるが、雌では稜線にならない。歯式は I3/3,C1/1,P4/4,M1/2=38。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村 (旧豊根村、富山地域)、設楽町 (旧設楽町、津具地域)、東栄町、豊田市 (旧豊田市、稲武地域、旭地域、小原地域、足助地域、下山地域)、新城市鳳来地域、豊川市 (旧豊川市、一宮地域)、岡崎市額田町、幸田町、瀬戸市、尾張旭市。

【国内の分布】

北海道 (導入)、本州、四国、九州、佐渡島 (導入)、淡路島、対馬に分布する。

【世界の分布】

日本と朝鮮半島にのみ生息するが、朝鮮半島では絶滅した可能性が指摘されている (佐々木,1997)。

【生息地の環境 / 生態的特性】

森林に生息し、木登りが得意で、通常は樹洞に営巣するが、人家の天井などを利用することもある (阿部,2000)。食物はネズミなどの小哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類、果実類などである。特に秋にはサルナシやアケビなどの漿果を大量に食べる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内でテンの生息が確実なのは三河地域を中心とする 10 市町村であり、知多半島には確かな記録がない。先史時代の遺存骨が 八王子貝塚・枯木宮貝塚 (西尾市) と伊川津貝塚 (田原市渥美地域) で出土し、江戸時代には尾張地域平野部と知多半島でも生息していたので (宮尾,1985) 現在での分布の縮小は著しいものがある。生息数の減少は森林の縮小と生活環境の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

テンは森林性であり、森の中を主要な生活の場としているが、登山道、遊歩道、林道なども日常的に利用している。したがってテンの生息地域では、移動や採食を可能とする植生が失われないように留意し、潜在植生の回復や食物となる小哺乳類を含む生物群集全体を保全しなくてはならない。

【特記事項】

ステンの分布は局限され、紀伊半島南部と四国が主で、これらの地域では 9 割を占めるが、他の地域ではほとんど見られないという (渡辺,1999)。1737 年に成立したとみられる『尾陽産物志』には、愛知郡、海東郡、知多郡にテンが生息していたことが示されている (宮尾,1985)。日本哺乳類学会では普通種とされている (佐々木,1997)。

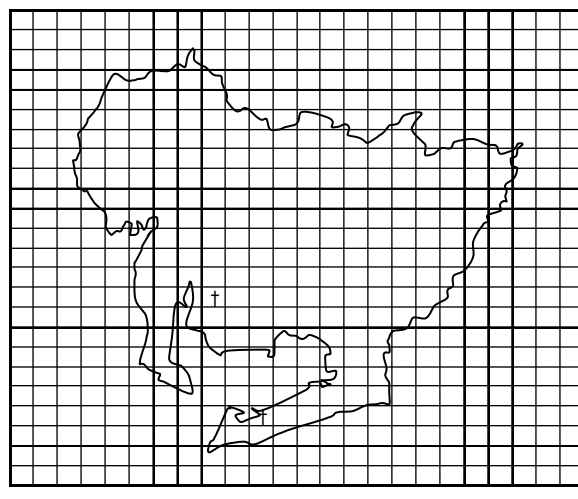
【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
宮尾嶽雄, 1985. 哺乳類. 西春町史資料編 2, pp.221-259. 西春町史編集委員会, 西春町役場.
佐々木 浩, 1997. イタチ科 Mustelidae. レッドデータ日本の哺乳類, pp.100-107. 文一総合出版, 東京.
渡辺茂樹, 1999. ニホンテン. 石川県の哺乳類, pp.63-64. 石川県環境安全部自然保護課, 金沢.

【関連文献】

- 原田猪津男, 1998b. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-資料-, pp.186-190. 豊川市, 豊川.
伊川津遺跡発掘調査団(編), 1988. 伊川津遺跡. 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4. 渥美町教育委員会, 愛知県渥美町.
宮尾嶽雄・酒井英一・子安和弘・蜂矢喜一郎, 1990. 愛知県西尾市八王子貝塚出土の陸上哺乳類遺存体, pp.32. 西尾市教育委員会, 愛知県西尾市.

県内分布図



スナメリ *Neophocaena phocaenoides* (G.Cuvier)

【選定理由】

国内には形態的・生態的・遺伝的に個別の特徴を持つ個体群が少なくとも 5 海域に存在するとされ、県内のスナメリ個体群は伊勢湾・三河湾に生息する小個体群に属する。1991～1994 年の調査結果ではこの個体群の構成員は 1900 頭と推定されているが (宮下ほか,1994)、推定精度の幅や変動を考慮すると 1000 頭を割り込む可能性があり、また漁業による混獲、水質汚染・埋め立てなどによる環境悪化が個体数を減少させると考えられる。

【形態】

体重 45kg 前後、体長は通常雄で 180cm 以下、雌で 164cm 以下であるが、まれに 200cm 前後に達する個体もある (笠松・宮下,1991)。背ビレはないが、背中中央から小さい隆起が尾ビレに向かってあり、上・下顎の片側に 13～22 対のスペード状の歯を持つ。胸ビレは比較的大きく、体長の約 1/6、尾ビレも大きく、その幅は体長の約 1/4 (笠松・宮下,1991)。流線型の体をしているが、マイルカやオオギハクジラのような「くちばし」はもたない。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市 (旧田原町、赤羽根地域、渥美地域)、蒲郡市、常滑市、南知多町、美浜町、一色町、幡豆町、碧南市、豊川市御津町、豊橋市で記録されている。

【国内の分布】

西九州、瀬戸内海、門司から能登半島までの日本海沿岸と、紀伊水道から仙台湾までの太平洋沿岸域 (粕谷・宮崎,1997)。

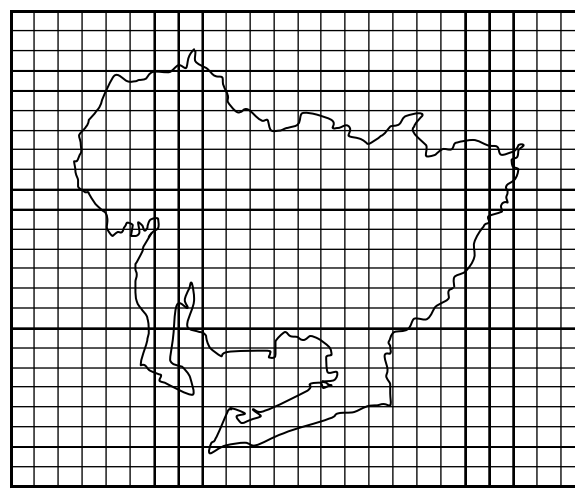
【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、東南アジア、インドの各沿岸域と汽水域。

【生息地の環境 / 生態的特性】

沿岸性が強く、海岸からほぼ 5～6km 以内の浅いところを好む (笠松・宮下,1991)。10 頭以上の群をつくることもあるが通常は 1～3 頭で遊泳する姿が漁船・フェリーなどから目撃される (若林ほか,2001)。国内には形態や DNA によって区別できる 5 個体群が認められている (粕谷・宮崎,1997)。三河湾東部におけるストランディングは春期と秋期に増大する (保尊ほか,2008 ; 長谷川,2008)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

愛知県の南方に広がる伊勢湾・三河湾は、国内における本種の主要な生息海域のひとつとして知られており、宮下ほか (1994) は 1991～1994 年の調査結果から同海域の生息数を 1900 頭と推定している。漁業での混獲と汚染・埋め立てによる生息環境の悪化が個体数減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

定置網、巻網、トロール、流し網、底刺し網などによる混獲が指摘されている (粕谷・宮崎,1997)。生息数の推定値の精度を上げ、その変動傾向や要因の調査研究を行い、混獲の影響や有機塩素化合物などの体内蓄積など環境悪化の影響を評価して保全対策をはかる必要がある。沿岸海域における大規模な埋め立て工事の際には、スナメリ個体群の保全対策とモニタリングが必要である。

【特記事項】

水産資源保護法施行規則により、北緯 40 度～南緯 40 度の海域で捕獲禁止。水産庁による希少種。出村 (1921) は南知多町の篠島周辺で「鯨砂滑等は今尚近海に出没せり」と述べ、大正年間に三河湾でスナメリや他のクジラ類の生息を記述している。種の保存法による国際希少野生動物種。

【引用文献】

- 長谷川修平, 2008. 伊勢湾におけるスナメリのストランディング. 勇魚, (48): 25-32.
保尊 脩・子安和弘・織田鉄一, 2008. 愛知県三河湾におけるスナメリのストランディング記録 6. マンモス特別号, (10): 53-57.
出村 銀, 1921. 篠島史蹟, 151pp. 博信社, 名古屋市.
笠松不二男・宮下富夫, 1991. 鯨とイルカのフィールドガイド, 148pp. 東京大学出版会, 東京.
粕谷俊雄・宮崎信之, 1997. クジラ目 CETACEA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.139-185, 221-233. 文一総合出版, 東京.
宮下富夫・島田裕之・帝釈元・浅井康行, 1994. 伊勢・三河湾におけるスナメリの密度とその季節変動. 平成 6 年度日本水産学会 秋季大会講演要旨, p.58. 三重大学, 津市.
若林郁夫・松本カト 剛・岡田佳理・坂本里美, 2001. フェリーによる伊勢湾の対列観察の試み. 三重の生きものだより, (9): 2-4.

アナグマ *Meles anakuma* Temminck

【選定理由】

県内のアナグマについては断片的な情報しか得られていないが、分布域は不連続的で狩猟圧もあるため今後個体数を減少させる可能性がある。個体数のモニタリングのための早急な基礎調査・研究が必要とされている。

【形態】

頭胴長 440~680mm、尾長 116~180mm、後足長 57~91mm、耳介長 38~47mm、頭骨最大長 109.3~113.0mm (阿部,2000)。頑丈な体に太く短い四肢を持ち、手の爪は特に強大。耳介は小さく円盤状の鼻鏡をもつ。尾は短い。頭蓋では吻が比較的短く、鼓室胞が小さい。上顎の第4小臼歯は発達が悪く、他のイタチ科のように「裂肉歯」としての機能を果たしていない。上顎第1大臼歯は四角形をしている。日本産のアナグマの歯式は $I3/3, C1/1, P3/3, M1/2=34$ 。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村富山地域、豊根村、東栄町、設楽町 (旧設楽町、津具村)、新城市 (旧新城市、作手地域、鳳来地域)、豊川市 (旧豊川市、音羽町)、豊田市 (旧豊田市、足助地域、稲武地域、旭地域、小原地域、下山地域)、岡崎市額田町、田原市渥美地域、犬山市、小牧市、春日井市、名古屋市。

【国内の分布】

本州、四国、九州、小豆島に分布する。

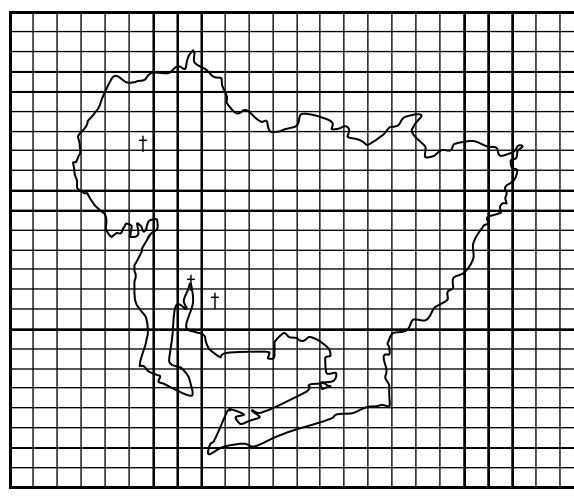
【世界の分布】

ユーラシア大陸に広く分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

低山帯の森林や低木林に巣穴のトンネルを掘って生活している。巣穴には血縁の家族群ですみ、ミミズ類、昆虫類、両生類、果実類などを食べる。繁殖期は春で、1回に1~4仔を産む。完全な「冬眠」はしないが、厳冬期には穴の中にももってなかなか外にでないことがある。秋には越冬にそなえて採餌活動の量が増える。完全な夜行性なので、アナグマの巣穴の使用状態を知るには、巣穴の入り口に立てかけた木の枝が翌朝動いているか見ればよい。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

現在のところ、尾張丘陵部と知多半島を除いた県内に広く分布が見られるが、分布域はパッチ状である (宮尾ほか,1984)。尾張丘陵部と知多半島での絶滅はかなり以前であると考えられている (宮尾ほか,1984)。個体数が比較的多いと考えられる三河山間部では、農産物に被害をもたらすことを理由に捕獲されることもあり、市街化による環境悪化とあいまって個体数を減少させる可能性があるが、現状ではあまりにも情報が不足していて正確な評価を下すのが困難である。

【保全上の留意点】

アナグマに関する早急な生息調査をふくむ生態調査・研究が必要とされている。

【特記事項】

県内の先史遺跡でアナグマの遺存骨の出土が見られたのは、亀山遺跡 (渥美郡福江町)、保美貝塚・伊川津貝塚 (田原市渥美地域)、大蚊里貝塚 (豊橋市大村町)、八王子貝塚・枯木宮貝塚 (西尾市)、朝日遺跡 (清洲市)、大曲輪貝塚・下内田遺跡 (名古屋市)、宮西貝塚 (知多郡東浦町) である。日本哺乳類学会では普通種とされている (佐々木,1997)。

【引用文献】

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
佐々木 浩, 1997. イタチ科 Mustelidae. レッドデータ日本の哺乳類, pp.100-107. 文一総合出版, 東京.

【関連文献】

原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 愛知県北設楽郡設楽町, 設楽町.
伊川津遺跡発掘調査団(編), 1988. 伊川津遺跡. 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4. 渥美町教育委員会, 愛知県渥美町.
西尾市教育委員会, 1981. 自然遺物・人骨, 80pp. 枯木宮貝塚 I. 西尾市教育委員会, 愛知県西尾市.
酒詰仲男, 1984. 日本縄文石器時代食料総説, 338pp. 土曜会, 京都. 再版.
宮尾嶽雄ほか, 1990. 愛知県西尾市八王子貝塚出土の陸上哺乳類遺存体, pp.32. 西尾市教育委員会, 愛知県西尾市.

ニホンジネズミ (佐久島の個体群) *Crocidura dsinezumi* (Temminck)

【選定理由】

北海道、本州、四国、九州と佐渡島などの属島に広く分布し、県内での分布も広いが、県内の島嶼部では佐久島 (一色町) のみに分布が認められ、本県島嶼部に生息する唯一の食虫類種として貴重である。島嶼部では生息個体数も限られ、また外部地域からの移住機会も偶然以外には通常あり得ないために地域個体群として絶滅の可能性がある。下顎骨形態の比較から、佐久島の個体群は愛知の個体群と別グループをつくることが明らかにされた (高田,2004)。

【形態】

体重 5.0~12.5g、頭胴長 61.0~84.0mm、尾長 39.0~54.0mm、後足長 11.5~15.0mm、耳介長 7.1~9.1mm、頭骨最大長 16.5~19.3mm (阿部,2000)。尾率 70%前後の中型のジネズミ。尾の基半部には剛毛がある。毛色は腹面で淡灰褐色であるが、背面は暗赤褐色から暗褐色まで変異に富んでいる。頭骨は比較的大きく、脳頭蓋は卵形をしている。眼窩下孔の後縁は上顎第 1 大臼歯中央を通る線上ないし前方にある。歯式は通常 I3/1,C1/1,P1/1,M3/3=28 とされている。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村、設楽町 (旧設楽町、津具地域)、豊田市 (旧豊田市、稲武地域、下山地域)、新城市 (鳳来地域、作手地域)、豊川市、一色町佐久島、三好町、犬山市、春日井市、瀬戸市、日進市、名古屋市、知多市、安城市 (小鹿,2005)。弥生時代中期の朝日遺跡 (清洲市朝日貝塚) で下顎骨が出土している (山崎・織田,2005)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、ならびに佐渡島、淡路島をはじめとした属島 (高田,2004)。

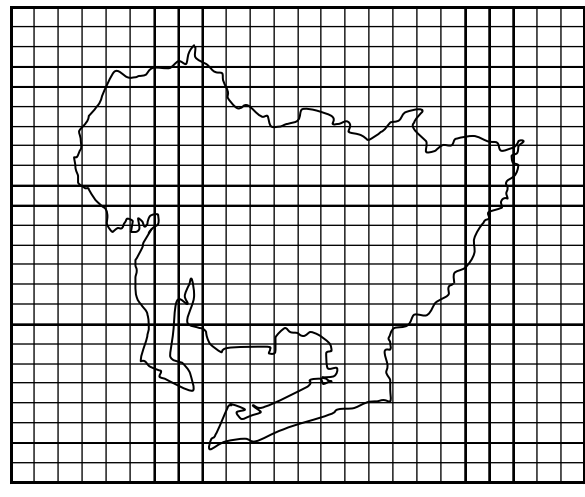
【世界の分布】

日本と韓国济州島に生息するとされるが济州島のものは再検討が必要 (阿部,2000)。

【生息地の環境 / 生態的特性】

ニホンジネズミは森林中の下生え、アカマツ林、照葉樹林、溪流の岸辺、水田の畦、農耕地、休耕地、河川敷、人家周辺の石垣などに生息する (本川,1998)。小型昆虫やクモ類、ジムカゲなどを捕食し、雌は春に 3~4 頭の仔を産み、寿命は 1 年余という (阿部,1994)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

島嶼個体群としては県下では佐久島のみが知られており、その生息は佐久島内に限られる。人家周辺の大規模工事や生物多様性に配慮しない改修工事などによって生息可能な環境の破壊や縮小が進行すると考えられる。

【保全上の留意点】

島嶼部以外では稀な動物ではないが、愛知県の属島としては唯一三河湾の佐久島にのみ生息する。民家に入ることもあるが、完全な住家性ではなく人家周辺の攪乱されやすい環境に生息している。したがって、人家周辺の環境整備などの際には生息環境の保全に留意すべきである。

【特記事項】

北海道、本州、四国、九州以外の島嶼個体群は以下の島々に認められる (本川,1998 ; 高田,2004)。日本海側：飛島、粟島、佐渡島、島後、西ノ島、知夫里島、見島、相島、沖ノ島、中通島、福江島；太平洋側：新島、佐久島、淡路島、種子島、屋久島、口之島、中之島。

【引用文献】

- 阿部 永, 1994. モグラ目 INSECTIVORA. 日本の哺乳類, pp.17-36. 東海大学出版会, 東京.
阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
本川雅治, 1998. 日本産ジネズミ亜科の自然史. 食虫類の自然史, pp.275-349. 比婆科学教育振興会, 庄原市.
小鹿登美, 2005. 愛知県安城市哺乳類の記録. マンモス特別号, (7): 4-9.
高田靖司, 2004. 島におけるジネズミの形態分化. 哺乳類科学, 44(1): 17-24.
山崎 健・織田鉄一, 2005. 愛知県における遺跡出土の食虫類・齧歯類(縄文時代~弥生時代). マンモス特別号, (7): 10-16.

【関連文献】

- 原田猪津男, 1996. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.

コウベモグラ (名古屋城外堀の個体群) *Mogera wogura* (Temminck)

【選定理由】

国内では、本州中部以南、四国、九州ならびに隠岐諸島などの属島に広く分布し、県内での分布も広いが、通常は地上へ出ない地中性の生態特性が強いため都市化の進行に伴って個体群の分断がおきやすい。島嶼部では生息個体数も限られ、また外部地域からの移住機会も偶然以外には通常あり得ないために地域個体群として絶滅の可能性がある。地中性のコウベモグラにとって、名古屋城外堀 (名古屋市中区) で発見されたコウベモグラ (植松ほか,2004) は都市という「海」に囲まれた「陸の孤島」に住む個体群で、常に絶滅の危機にさらされている (Berry & Warwick,1974 参照)。

【形態】

体重 48.5~175.0g、頭胴長 125.0~185.0mm、尾長 14.5~27.0mm、前足長 16.8~25.5, 22.0~33.0mm (爪を含む)、前足幅 16.0~25.0mm、後足長 16.5~24.0mm、頭骨最大長 33.0~42.1mm (阿部,2000)。体の大きさはきわめて変異に富み、九州西南部 (種子島、屋久島を含む)、九州山地、対馬などの小型個体群と本州中部の大型個体群では体重で 2 倍ほどの差がある。歯式は I3/2,C1/1,P4/4,M3/3=42、脊柱式は C7+T14+L5+S6+Cd12=44 (阿部,2000)。名古屋城外堀のコウベモグラは阿部 (2000) のいう本州中部の大型個体群よりさらに大きな体をもつ、日本最大のコウベモグラである。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、尾張旭市、設楽町 (旧設楽町)、岩倉市、瀬戸市、北名古屋市、名古屋市、稲沢市、安城市 (小鹿,2005) など県下に広く分布する。弥生時代中期の朝日遺跡 (清洲市朝日貝塚) で上顎骨・上腕骨など 4 点が出土している (山崎・織田,2005)。

【国内の分布】

本州中部以南、四国、九州および隠岐諸島、対馬、五島列島をはじめとした本州と九州の属島ならびに小豆島・淡路島などの瀬戸内海諸島。

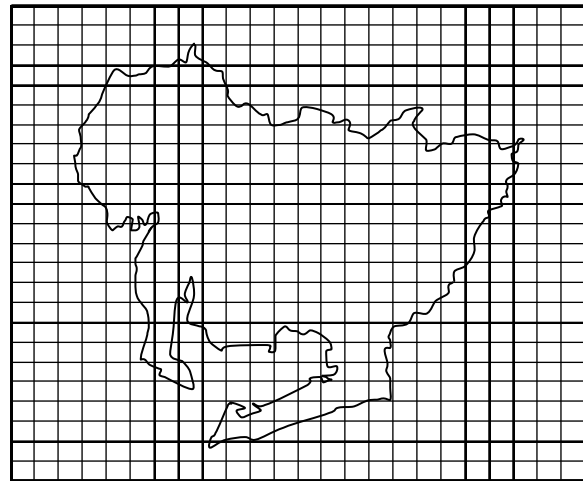
【世界の分布】

日本から朝鮮半島、ロシア沿海地方南部、中国東北部に分布する (阿部,2000)。

【生息地の環境 / 生態的特性】

低地から低山帯の農耕地、草原に多く、森林内の生息密度は低い。地下にトンネル組織をつくり繁殖期以外は単独のナワバリをもつ。昆虫類、ミミズ類を主食とし、秋には植物の種子なども食べる。通常は春に 1 回繁殖し、2~6 頭の仔を産む。寿命は 3 年余りであるが、3 年以上生きるものは稀である (阿部,2000)。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

名古屋城外堀 (名古屋市中区三の丸の大津橋周辺) にコウベモグラの生息することが発見されたのは 2002 年 5 月のことである。その後の調査での捕獲個体も含めると雄 4 頭、雌 5 頭の合計 9 個体が捕獲されている (植松ほか,2004)。この個体群は市街地に囲まれて隔離されており、生息範囲も小さいので構成する個体数も少ないと考えられ、特段の要因がなくとも絶滅の可能性がある。

【保全上の留意点】

名古屋城外堀のコウベモグラの生息地は大半が斜面であり、岩礫で構成される底面 (かつての瀬戸電気鉄道外堀線の軌跡) には生息の痕跡が認められないという (植松氏私信)。したがって、この個体群が現在の外堀全体に生息していると思なすのは誤りで、きわめて脆弱な生息環境であることを認識し、常に個体数減少をもたらす要因を排除するためのモニタリングと保全策が必要である。

【特記事項】

英国スコットランドの首都エディンバラの市街地中央部にはエディンバラ城の建つ火山性の岩山があり、このモリアカネズミは他の集団から隔離され、その形態にも分化がみられる (Berry & Warwick,1974)。

【引用文献】

阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
Berry, R.J. & Warwick, T., 1974. Field mice (*Apodemus sylvaticus*) on the Castle Rock, Edinburgh: an isolated population. *J. Zool., London*, 174: 325-331.
小鹿 登美, 2005. 愛知県安城市の哺乳類の記録. *マンモ・ス特別号*, (7): 4-9.
植松 康・酒井英一・高田靖司, 2004. 名古屋城外堀で採集されたコウベモグラの体の大きさ. 第 36 回成長談話会大会, プログラム・抄録集: 10.
山崎 健・織田 統一, 2005. 愛知県における遺跡出土の食虫類・齧歯類 (縄文時代~弥生時代). *マンモ・ス特別号*, (7): 10-16.

